

2. 1. 1 課題を知る学習

本校の地域創造と人間生活は、①自分を知る、②地域を知る、③世界を知るという3つの柱でカリキュラム開発を行ってきた。①については自分史やマインドマップを用いた自己理解を通して、将来を見据えてありたい自分を考え、②では演劇を通して地域の課題を知る学習を行い、③ではイラクでエイドワーカーとして活躍する高遠菜穂子氏などの協力で、世界の課題を知り、自分、地域、世界をつなげ、2年次後半からの未来創造探究に繋げてきた。今年度は中高一貫生と高入生が合わさる初めての学年ということで、学びのバージョンアップを目指し、これまで高校2年次から実施していた探究を1年次の11月から実施し、演劇と探究の接続を丁寧に行った。

(1) 実施内容

① 地域創造と人間生活 オリエンテーション

入学者への課題として「自分史」を実施し、これから地域やそこで生きる人々と出会う前に自分のこれまでの人生を振り返った。覚えていないことについては家族に聞きながら記入することでせることで、家族との対話の時間を持つことができたという感想があった。オリエンテーションでは改めてこの学校が設立された経緯や、これから地域と出会う前のイントロダクションとして、双葉郡の紹介を丁寧に行った。

身に付けて欲しい力

目標

地域や社会の変化を見通しながら、**自己の在り方生き方を考える活動**を通して、**主体的に地域に参画し、新たな価値を創造**するための資質・能力を育成する。

社会の変化の中で、主体的に新たな地域社会の創造に参画していく自覚と態度を養う

地域社会の変化を多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく

自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、主体的に学び続ける能力と態度を養う

② 双葉郡8町村バスツアー

日 時：6月14日（火）

講 師：

1号車	広野町	磯辺吉彦（広野わいわいプロジェクト）
		青木裕介（広野ぷらっとあっと）
		新妻良市（新妻有機農園）
		正木里奈（ワークショップ講師）
2号車	檜葉町	中井俊郎（JAEA） 青木隆宏（一般社団法人ならはみらい）
3号車	富岡町	青木淑子（富岡町3.11を語る会）
		平山 勉（ふたばいんふお）
4号車	川内村	三瓶義浩（一般社団法人かわうちラボ）
		井出寿一（一般社団法人かわうちラボ）
5号車	双葉町	小泉良空 （一般社団法人ふたばプロジェクト）
		佐藤真喜子（一般社団法人まちづくりおおくま）
	大熊町	武内一司（喫茶レインボー）
		松永秀篤（熊川稚児鹿舞保存会）
6号車	浪江町	佐藤秀三
7号車	葛尾村	下枝浩徳（一般社団法人葛力創造舎）

行 程：

1号車 広野町

学校 ～ ぷらっとあっと ～ 新妻有機農園～ 箒平地区にて移住者との対話 ～ ひろの未来館（海洋ゴミでアクセサリをつくるWS） ～ 学校

2号車 檜葉町

学校 ～ 檜葉遠隔技術開発センター ～ レストラン岬 ～ みるーる天神 ～ 木戸川漁協 ～ J ヴィレッジ ～ 道の駅ならは ～ みんなの交流館ならは CANvas ～ 学校

3号車 富岡町

学校 ～ ふたばいんふお ～ 富岡高校 ～ 富岡沿岸部ツアー ～ さくらモール ～ とみおかアーカイブミュージアム ～ 学校

4号車 川内村

学校 ～ 川内村役場 ～ いわなの郷 ～ 草野心平記念館（天山文庫） ～ 幻魚亭 ～ 上川内諏訪神社・長福寺 ～ 完全密封型野菜向上 KiMiDoRi ～ いちご工場 ～ 複合施設「ゆふね」 ～ 学校

5号車 双葉町・大熊町

学校 ～ 双葉高校 ～ 双葉郡内ツアー ～ 双葉町産業交流センター ～ 大熊町内ツアー ～ おおくまーと・喫茶レインボー ～ Linkの大熊～ 学校

6号車 浪江町

学校 ～ 福島ロボットテストフィールド ～ 道の駅なみえ ～ なりわい館工房（大堀相馬焼絵付け体験） ～ 浪江町周辺 ～ 学校

7号車 葛尾村

学校 ～ ZICCA ～ かつらおやぎ広場がらがらどん ～ 葛尾大尽屋敷跡公園 ～ 葛尾村郷土文化保存伝習館～ 学校



概要：

双葉郡の現状と課題を実際に自分の目で見て、この地で学ぶ意味を考えるとともに今後の演劇及び探究活動につなげることを目的として、双葉郡8町村バスツアーを

毎年実施している。今回、8町村それぞれのバスツアー（大熊・双葉のみ1つにまとめて計7コース）を企画し、1日かけて双葉郡を歩いた。浪江高校、双葉高校、富岡高校を訪問した生徒達の中には、大震災から10年以上経つ現在でも、時がとまったままの校舎を見て言葉を失っている生徒もいた。

また、地域で生きる方々や、地域を盛り上げるために活動している方々とも直接交流ができたことで、今後の演劇創作や未来創造探究につながる学びとなった。本校には、福島県外出身者も多数在学している。事前に調べ学習を行い、実際に自分の足でその地を訪れた際に得る学びが深化したと考えられる。また、双葉郡出身者で、震災後避難して以来初めて故郷を訪れる生徒も一定数おり、バスの中から自分の家のあたりを必死で探す様子もみられた。震災以前とは様子の変わった町に驚く生徒もいたが、11年振りに故郷を見て様々なことを感じたようだ。バスツアー振り返りでは、こちらが想像したよりも生徒は多くの学びを得ていたようだ。

③夏休みプチ探究

夏休みの宿題として、プチ探究を実施した。右上の3つのコースから自分に合ったものを選んでもらった。成果物として、アクション結果をGoogle Formに入力することと、短い動画にまとめて提出してもらった。提出先は、生徒達でも携帯電話から簡単にアップできるよう、Flipgridを使用した。バスツアーを経て、双葉郡の気になる所について調べる者もいれば、純粋な自分の興味関心についてひたすら深掘りする者もいた。生徒達の得意とする動画を使った表現にしたことで、楽しみながら取り組むことができたようである。提出された動画はどれもクオリティが高く、生徒同士の知的好奇心をくすぐるものばかりとなった。夏休み明けには表彰式を実施し、ベストアクション賞、ベストクリエイター賞、ベストリサーチ賞、ファーストペンギン賞として14名の生徒を表彰し、景品として知育菓子を贈呈した。

3つから1つ選んでアクションプランを作ろう	
[A]	自分や誰かの困りごとを解決！ 「未来創造探究」先取りコース
[B]	興味あることをひたすら深掘り！ 「フカボリ探究」コース
[C]	とにかく助け！ 「ひたすらアクション」コース

◆ベストアクション賞

- 「県内・寿都高校生との交流を通して」
- 「宮城研修で震災遺構を訪れて」
- 「医療の仕事1日体験デー2022に参加して」
- 「福島の放射能問題や課題に対する取り組みについて」

◆ベストクリエイター賞

「ひとりバンド」

◆ベストリサーチ賞

- 「同調圧力について」
- 「テクノポップの歴史と音楽ジャンルの傾向の変化」
- 「夢日記からわかるわたしの真理」
- 「地域医療について」
- 「ドイツから学ぶ日本が多様性を受け入れる社会づくり

を行うにあたって」

「海外と日本の色彩感覚の差」

「人体への影響から考える1000万ボルトの本当の威力」

◆ファーストペンギン賞

「児童クラブボランティアに参加して」

「宮城県の震災遺構」



「医療の仕事1日体験」



↓「ドイツから学ぶ多様性を受け入れる社会づくり」



「福島の放射能問題や課題に対する取り組みについて」↑

生徒感想より

「プチ探究をやってみて調べてくる時に出てくる数々の記事が印象的でした。僕はプチ探究をやることは新しいことを知ることに加えて自分で何かをすることやどンドン気になることを調べたくなることだと気づきました。沢山のことを知ることによって自ら行動する気力を起こす事ができました。何かを調べることはとてもワクワクするので、他にも何か調べてみようかなあという気持ちになりました。」

「自分の好きなことや気になったことについて細かく調べてアクションを起こしたり、まとめられる時間を学校の課題として設けてもらえるのが嬉しく、楽しかったです。」

(2) 成果

昨年度と比較すれば、今年度はコロナ前のような活動ができた。同時にコロナ禍に普及したICTを活用して学びの共有を有効に行うこともできた。また、今年度はすでに探究で取り組みたい分野がハッキリしている生徒が多く、プチ探究で生徒たちの興味・関心を知ることができたことで、後半の未来創造探究のスタートアップでの面談等に大いに役立った。

(3) 課題と展望

1日かけてバスツアーを実施するようになり、1つの町村をじっくり体験することができるようになった。コースの打ち合わせなどの事前準備が大変ではあるが、その分生徒たちの学びは大きいので、引き続きそれぞれの地域をより深く学ぶ機会としていきたい。

2. 2. 1 探究オリエンテーション

2～3年次の「総合的な探究の時間」では、地域の問題の解決に向けた実践プロジェクトを創出する。本校で「未来創造探究」と呼ぶその授業において、生徒は自らの興味関心に従い、「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」の6つからひとつのゼミに所属して探究活動を行う。オリエンテーションでは自分の興味・関心（Will）や地域の課題（Need）について考えたうえで、ゼミ選択を行った。

（1）はじめに

本年度は「未来創造探究」の授業とは何か、目的は何かを入念に確認するところから始めた。そのうえで、探究テーマを決めるためのステップとして、「マインドマップ」「マンダラート」「50の問いづくり」のワークを実施した。テーマの決定とゼミ選択をスムーズに行うために、ゼミ担当者が作成した「ゼミマップ」を公開し、ゼミ決定前に探究担当者と生徒で面談を実施した。

（2）実施内容

「未来創造探究」の授業に入るにあたり、まずは高校1年次1年間の「地域創造と人間生活」の取り組みを振り返り、自分の考えを整理するところから始めた。探究活動はどのように進めていくのか、考えるべき地域社会とはどの範囲を指すのかを説明し、地域社会の課題探究とはすなわちそこにいる人間の課題探究であること、課題を解決することよりも課題を発見することが重要であることを確認した。これは探究テーマを支える「問いづくり」が今後のゼミ選択・探究活動に大きく関わってくるからである。

自分の興味・関心（Will）や地域の課題（Need）をうまく掛け合わせたマイキーワードを絞るために、まずは「マインドマップ」の手法を取った。そこから気になるいくつかのキーワードを選び「マンダラート」を用いてキーワードの解像度を上げていく。最後に問いを深められそうなキーワードから「50の問いづくり」を実施し、探究テーマにふさわしい課題設定を試みた。問いづくりはWhat（何を）やHow（どうやって）という疑問詞の視点だけでなく、定義説明（〇〇はどういう意味？）や事例（〇〇とは例えば？）という問いの視点、あるいはキーワード×学問分野など広い視点から問いを作るよう促した。

生徒の適切なゼミ選択のために、探究担当教員による「ゼミマップ」の作成を試みた。生徒が実施するマインドマップの活動への理解を深めつつ、担当教員各個人の個性を踏まえてゼミ内で展開できる活動のテーマやその

幅をキーワードで端的に示すことができた。生徒は自分のマイキーワードや問い、探究テーマと各ゼミマップの共通点を探しながらゼミ選択について考えることができた。そののち、自分の興味関心にに基づき、6ゼミ（「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」）の担当者と面談し、所属ゼミを決定していくという流れになる。

（3）成果

オリエンテーションとして未来創造探究の授業の意義、課題発見・問いづくりの重要性を確認したことで、問いづくりワークショップ、そしてゼミ選択へと円滑に進めることができた。また、担当者月次会での「ゼミマップ」作成は、生徒のゼミ選択に大きく貢献しただけでなく、生徒の探究活動に「教員も参加していく」という意識づけに大きな効果を発揮したと言える。

（4）課題と展望

ゴールデンウィーク期間中に「50の問いづくり」を完成させることを宿題とした結果、生徒によって出来具合がバラバラになってしまったが、ゼミ選択までのスケジュール上全体で十分なフォローができなかったこと、また、一度ワークシートに記入した50の問いを記録のために再度Googleフォームに入力させたことが、一部の生徒にとって問いづくりをより煩雑な作業と感じさせてしまい、重要性を伝えるためのオリエンテーションと逆効果になってしまった点があげられる。実際、ゼミ選択後も自分が決めたテーマに自信や展望が持てず面談を繰り返した生徒や、ゼミ移動を希望する生徒が出た。

加えて、今後は探究活動が行き詰まった時やテーマ設定に悩んだ時に振り替えることができる蓄積という側面でも、自分が過去に作成した「マインドマップ」や「問いづくり」ワークシートを有効活用できるような方法を確立できると良いのではないだろうか。

2. 2. 2 進路探究 キャリア学習

本校の「未来創造探究」は、火曜日の6・7校時と金曜日の3校時に設定されている。本年度の金曜日の授業は、進路に関する学習を中心に行われた。外部講師による入試・進路選択についての講話、志望理由書に関する講演会と作成、奨学金制度とは何か、といった講演、さらに次年度に行う予定のセルフエッセイ作成を通じ、自分の進路について深く考える時間とした。

(1) はじめに

今年度は火曜探究2時間と金曜探究1時間の連携・往還を深め、探究と進路ひいては教科学習の意欲が高まるよう、関係部署による連携を綿密に行った。

(2) 実施内容

前期（4月～9月）の前半は、まだゼミの所属や探究内容も明確ではないため、自らの興味関心と、それが地域・社会にどうかかわっていきけるかという視点を中心に、テーマ設定・問い設定の助けとなるよう、授業内容を設定した。

例えば、社会科学的な視点からは、処理水の問題、メディア報道のあり方、過疎化・高齢化問題、自然科学的な視点からは主に放射線について理解を深め、それについて簡単な議論も行った。

また、前期の後半においては、探究に行き詰まる生徒も散見されたタイミングを見計らい、SDGsという観点で、全世界的な課題を復習しつつ、日本の課題の特徴を捉え、また、課題は独立して存在するのではなく、様々な問題と関連を持ちながら存在することに目を向けることで、視野を広く持たせ、より自分の興味関心のある課題について理解を深めるきっかけを作った。

後期（10月～）になると、生徒の探究テーマ・問いもある程度決まり始め、解決のためのアクションも少しずつ実践されるようになり、各生徒が自分なりの目標・方針を定めて進み始めた。そこで進路探究では、生徒の進路意識の向上を目指し、まずは志望理由書作成の講座受講、模試受験およびリライトによる文書作成を行った。四年制大学・専門学校進学希望者、就職希望者の全員がまず講演会を受講し、志望理由書がなぜ必要なのか、どのような書き方をすればよいか、と言った入門期の指導をした頂いた。その後、志望理由書の作成に入るが志望校を作成までに絞り、パンフレットなどの資料を取り寄せる等の事前準備を生徒に行わせ、進路意識を自らに引き寄せられるようにした。また業者が提供する自己診断適性検査の結果も参考にし、自分の適性（コンピテンシ

一）・長所等を客観的に見つめることで、深い自己理解に努めさせた。

同時期に「奨学金制度」に関する講演会も開催し、奨学金制度についての理解を深めさせるのと同時に、自らの進路が決定しなければ奨学金も志望理由書も動き出せない、ということを生徒に周知した。

今後、前年度は後期の後半（1・2月）に取り組んでいたセルフ・エッセイを3年次の前期に取り組む予定である。これまでの進路についての知識をベースとしつつ、より明確にしていくことを目的としている。セルフエッセイとは主に探究活動を通じた自分なりの生き方・在り方について、「書き手自身の個人的な知識や体験を基にし、読み手を説得するような、自分なりの意見を所定の書式に従って書くもの」である。進路意識の向上と、3年次4月の中間発表会を終え進路も含めた探究活動への本格的始動に位置付け、この時期の実施とした。

(3) 成果

火曜日6・7校時との連動を毎回意識したカリキュラム・マネジメントができた。また、進路探究の一つ一つの行事（講演等）を集中的に行ったため、各分野の講演が生徒の中で結びつき、継続的に進路について考える機会となった。

(4) 課題と展望

探究活動と進路活動の連携は、これまで通りの課題と言える。探究の内容と進路が必ずしも合致するとは言えないため、それぞれの担当者が情報を共有し、金曜日3校時と火曜日6・7校時の取り組みが、より進路に向けて効果的になされることが望ましいだろう。進路希望を把握している担任と、専門的な観点から探究内容を把握しているゼミ担当者とは、縦と横で紡ぐ網の目のように生徒理解に努めていくことは、大きな化学変化をもたらす可能性に満ちているため、このつながりを多く作ることができるような戦略を様々な場面で考えていくことが重要であろう。

2. 4. 3 原子力防災ゼミ

原子力防災探究ゼミ（以下原防ゼミ）は原子力発電所事故によって毀損された地域コミュニティの再生や、3.11の経験の伝承を考察することを目的としている。しかし近年は生徒の直接的な震災の記憶が薄くなっているためか、ゼミを選択してきた生徒の興味・関心、課題の捉え方は必ずしもゼミ本来の目的とは合致せず、直接的に原発事故をテーマとする者は少なくなってきた。

(1) はじめに

七期生は2011年3月の段階で彼らは幼稚園の年中に在籍していた世代である。本ゼミには11名（女子5名、男子6名）が参加し、7プロジェクトが進行している。

(2) 実施内容

生徒個々の興味関心に基づいてテーマを設定したため教員側からの一斉講義形式でのインプットはあまり行わず、基本的に生徒の活動に対する教員のフォローは個別に行っている。生徒ごとの担当教員も設定していない。毎回授業のはじめに全体で各プロジェクトの進捗とその時間の活動を確認する時間をとっている。

(3) 生徒のプロジェクトと活動内容

「なぜ海洋放出に反対運動が起こるのか？」

アカデミック理系女子の単独プロジェクトである。昨年度、放射線ワークショップを受けて、廃炉と海洋放出の問題について関心を持った。広島研修（詳細は本誌2.4.3を参考）にも参加し、事前研修の1F地域塾で廃炉の諸問題と未来の展望について考察した。



福島大学前川直哉先生の「東日本大震災の心理的影響」について講義受講、松谷彰夫『裁かれなかった原発神話』読了をへて、処理水放出に住民が納得していないという問題に関心を持ち、海洋放出反対運動と過去の原発建設反対運動の比較を試みた。数字の面と気持ちの面との乖離が見られるトランス・サイエンスの問題を考察するべく、いわき市久之浜で漁師をされている新妻竹彦さんにインタビューを行った。



インタビューの内容は右のQRコード先書き起こしをしている。今後の予定として茨城県の漁師さんへのインタビューを考えている。



「フードロスをなくすためには？」

トップアスリートの男子3名、商業系列の男子1名による共同プロジェクトである。当初はテレビ番組の企画を参考に「捨てられる野菜を集めて0円食堂」をテーマに掲げていたが、より深化させてフードロスにテーマに掲げた。町内の「お食事処ふたば」を訪問し、フードロスを押さえるための工夫を聞くとともに食事動画を撮影、担当教員の手つてにより福島放送「シェア」のコーナーで自分たちの活動を放送してもらった。動画は番組のYouTubeチャンネルにアップロードされている。リンクは右のQRコードより。



「古着を利用してなにができるか？」

ファストファッションはなぜ安いのか？ という関心から古着のアップサイクルについて考えるともに2022年8月27日の朝日新聞記事「古着の山 先進国がおしつけ」を読んでリサイクルの偽善性という視点にも気づけた。身近な古着である「クラスTシャツ」に着目し、過去のクラスTシャツがどうなっているか、今後のクラスTシャツをどうするか高2・3にアンケートをおこなった。現在は海洋後についても関心を広げている。

「多頭飼育崩壊について」

女子による単独プロジェクトである。自身もネコを飼っており、広野町にノラネコが多いことから関心を持った。2022年9月11日朝日新聞で広野と富岡のノラネコの記事をもとに広野町社会福祉協議会の根本さんに取材をおこなった。これにより広野町のノラネコ問題の背景にも震災の影響があることを知った(詳細はQRコードのリンクへ)。その後多頭飼いに至った広野町のHさん(昭和16年生まれ、81才)に話を聞いた。



「3.11は僕らにどんな問いを投げかけたのか？」

社会科教師を目指す男子の単独プロジェクトである。震災の記憶がない中学生に震災のことを伝える授業をしたいと考え、母校である小名浜二中の教員とのやり取りで授業をさせてもらえるよう交渉した。立命館大学産業社会学部現代社会学科の丹波史紀先生のミニ講義「原子力災害は地域に何をもちたか」を視聴して授業案を練っている。

中学生の政治的関心を高めたいとも考えており、10月18日に県の選挙管理委員の依頼を受け町内のイオンに赴き、お客さんに投票呼びかけグッズを配布した。

現在は授業案をつくり、ゼミ仲間へまず授業を試みることを目指す。

「富岡に写真を通じて何が出来るか？」

女子二人によるプロジェクト。3.11前後の写真を集めて比較し、問題点を読みとっていくプロジェクトである。とみおかアーカイブミュージアムを訪れ過去の写真を入手しようとしたが挫折。テーマを子どもの貧困に方針転換し、広野町のこども家庭課の職員に話を聞いた。



「神社ではどのような交流が行われ、生活にどのように影響を与えているか？」

女子による単独プロジェクト。双葉町の交流人口を増やすために、地域の中心にあった初發神社を核とした交流を起案した。宮司さんや町議員の山根さんに取材をし、町のイベントに参加した。



2022年に町に人が住めるようになり、駅西住宅が建設された。入居者の半数は以前住んでなかった人なので、情報を発信する必要を感じ、双葉町を紹介するホームページも作成した(右QRコード)。



(3) 成果

【A：社会的課題に関する知識・理解】

調査のアクションとして施設を訪れたり、アンケートを取ったりする活動を通して、多くの生徒が社会的課題に関する知識がまだまだ足りていない、想像と実際が異なるということを学ぶことができたようだ。

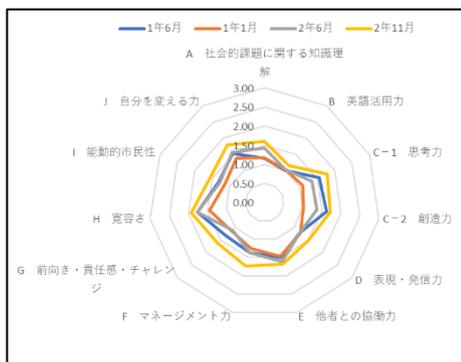
【D：表現・発信力】

特筆すべき成果の一つとして、メディアゼミからは4人の生徒がマイプロジェクトアワード福島県 Summit（オンライン）へ出場した。自らの探究の内容を他校の生徒やアドバイザーに向けて発表し、対話を通して考察を深めた。このような外部での発表の機会は、発表の仕方やスライドの見せ方を工夫する契機となるだけでなく、普段はなかなか話せない相手とコミュニケーションを取ることにつながるため、今後も機会を逃さず挑戦し続けてほしい。

【F：マネージメント力】

普通の教科の授業等ではなかなか発揮状況を確認したり評価したりする機会が少ないのが、マネージメント力（自己管理能力）である。1人で進めているプロジェクトと複数人で進めているプロジェクトでは、マネージメント力として求められる要素に多少の違いはあるが、教員やカタリバスタッフの助けがないとなかなか活動を進められない者もいれば、一度やり方を覚えてしまえばどんどん活動を進められる者もいる。本ゼミ担当者間ではこのマネージメント力をひとつの軸として生徒の伴走方法を考えていたこともあり、生徒が今指示を必要としているのか、何をすべきかを一緒に考えたり意見を聞き出したりする必要があるか、という点には特に注意を払って指導を行ってきた。実際、7期生の2年次11月時点のルーブリック自己評価では、6月時と比べてC-1思考力、Fマネージメント力、G前向き・責任感・チャレンジが大きく伸びていることがわかる。

	2年6月	2年11月
A	1.43	1.60
B	1.02	1.15
C-1	1.35	1.79
C-2	1.38	1.72
D	1.22	1.51
E	1.61	1.68
F	1.37	1.74
G	1.11	1.62
H	1.77	1.92
I	1.28	1.55
J	1.56	1.79
平均	1.37	1.64



【G：前向き・責任感・チャレンジ】

探究活動を進める中で、前述のルーブリックの結果の通り、生徒の前向きな態度やチャレンジ精神にも大きな成長が見られたと言える。数々の発表や対話の機会を通して、自分の考えを他者に伝えることへの抵抗感が薄れ、地域の方々と積極的に関わろうとする態度が育まれた。



(4) 課題と展望

【C-1：思考力】

ルーブリック評価では高い数値の伸びを見せているのがこの思考力であるが、ゼミ活動を通してみると、アクションの結果に対する考察や分析がまだ十分でないと思われる。一度出た結果や自分にとって都合の良いデータを疑ってみる批判的思考力に欠ける部分が見られ、今後の指導が肝要である。

【J：自分を変える力】

活動に全力で取り組んだり、あきらめずに遂行する前向きさは認められるが、自分の将来の目標や進路に関連付けて活動を進め、目標と現実の差を見つめたり、自省するということにかけてはまだ成長の余地があるように感じる。来年度は高校3年次になり、探究活動もいよいよ後半に差し掛かってくるからこそ、現状維持ではなく、自分に足りない部分に真摯に向き合って振り返り、自分を変えていく力が養われていくよう、生徒に寄り添って探究活動を進めていきたい。



2. 2. 3 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たな再生可能エネルギー推進ビジョンとして震災以降の社会情勢も反映させた「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

本校の再生可能エネルギー探究ゼミでは、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」をもとに福島県や双葉郡の現状を把握し、課題を見いだすことで解決の糸口を探究することが一般的な進め方であるが、私達は探究の動機付けとして学校周辺の産業や自然環境に着目し、フィールドワークや基礎実験などの演習を全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。

(1)はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒10名が協力しながら探究活動を進めてきた。全体の活動としては、広野海岸の清掃活動、浅見川の清掃活動・水質調査、請戸漁協訪問など、様々な取り組みを行ってきた。また、グループごとに7つの探究テーマを設定し、探究活動を進めてきた。

(2)実施内容

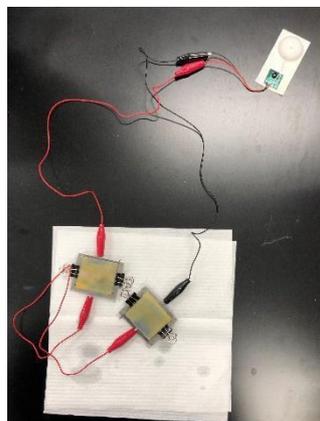
①テーマ：色素電池

地元である川内村の自然を壊さずに発電できる方法はないかという考えからこの探究活動を始めた。

「色素増感太陽電池」という発電方法を使って実験をしている。電気の循環発電の可能性があること、デザインによってはインテリアとして活用できる可能性があることに着目している。

本格的な実験の準備として、2つの活動を行った。1つ目は、専用キットを用いた色素実験である。実際に電気が流れているか確認するためにオルゴールを使用し、小音ではあったが音を確認することができた。2つ目は、川内村へのフィールドワークである。色素を抽出するためにどのような野菜等を用いるとよいかをインタビューしたり、実際に野菜等をいただけないか交渉したりした。

今後は、野菜等から色素を抽出し、実験を本格的に進めていく。



②テーマ：川内村の魅力を発信！

幼い頃から川内村の自然に囲まれて生活してきた。村の自然に親しみを持ち、どのようにして守られているのかを調べ、その魅力を広めたいと考えている。また、川内村で感じることでできる人と人の繋がりや温かさをもっと広めていきたい、とも考えている。「川内村の自然に触れて楽しむエコツーリズムを通して村の人と出会い交流し、そこから村は活性化するのか？」という仮説を立てて活動している。

具体的には、自然環境保全について調べたり、川内村出身の天山文庫管理人をしている志賀風夏さんに話を伺いに行ったりした。また、ツアーで実際に訪れたい場所の下見をし、川内村で活動される方の話を伺ったり、実際にツアーをする上での注意点を確認したりすることができた。

今後は、川内村の地図におすすめスポットなどを書き込む活動を計画している。そのために、村でお店を営んでいる方に話を伺い、おすすめスポットを調査する予定である。

③テーマ：人と海の関わり

津波が社会や自然に与える影響について調べていくなかで、海洋教育・防災教育という言葉を知った。もともと海に興味を持っていたこともあり、今はそれらについて調べている。

現在まで行った活動は4つ。1つ目は、施設見学である。請戸小学校、コミュタン福島、伝承館等を訪れ、震災や放射線に関する基礎的な知識を身につけた。2つ目は、寮の指導員の方へのインタビューである。寮における災害時マニュアルを見せていただき、避難経路のパターンや過去の災害時の対応について詳しくお聞きした。3つ目は、アクアマリンふくしまの岩田雅光さんへのインタビューである。海に恐怖心を持っている人の特徴についてお話を伺った。最後に、日本科学未来館のサイエンスコミュニケーターである中野夏海さんへのインタビューである。日本科学未来館での取り組みや海洋教育について教えていただいた。

今後は「子どもへの海洋教育」を主軸にイベント

等の実施を検討している。また、いわき市で海洋教育に力を入れている方にもインタビューの依頼を予定している。

④テーマ：福島の魚

釣り好きな仲間が集まったので、テーマを「福島の魚」とし、処理水問題と関連して探究している。漁業の状況が急激に悪化した。2018年に漁業が再開されたものの、ネット上では「危険」「命が危ない」「食べる気がしない」など、否定的な意見も少なからず見受けられる。こうした状況を払拭するため福島の魚の知名度と安全性を発信したい。

その第一歩として、福島の魚を皮膚感覚でとらえるために、富岡漁港と請戸漁港を訪問した。幸運にも富岡漁港では釣り船でヒラメ釣りをするという貴重な体験をした。結果は衝撃的なものであった。なぜこんなにも巨大なヒラメが入り食い状態で釣れるのか。海底は震災後どのような状態になっているのだろうか。船長さんのインタビューからたくさんのヒントを頂いた。さらに偶然乗船していたアクアマリンの職員の方より科学的な視点からの海洋汚染の現状と未来についてのお話を聞き、自分ごととして「福島の魚」を考えるきっかけとなった。請戸漁港では魚市場の見学と漁協の職員の方とのディスカッションを通して「福島の魚」の話はもちろん、ウニの磯焼けや海洋ゴミ、未利用魚問題、そして処理水問題など様々なテーマを深く掘り下げることができた。これらの学びをさらに発展させて次のアクションへと向かうことが私たちの使命である。



⑤テーマ：「海藻を呼び戻すために」

2009年に国連環境計画（UNEP）が出した、ここ十数年の比較的新しい概念「ブルーカーボン」を知っているだろうか。地球温暖化の原因といわれる温室効果ガス、その中でも最も存在量の多い二酸化炭素を陸地にある植物が光合成によって減らしてくれている「グリーンカーボン」ということは広く知られているが、それに対し海が減らしてくれるというのが「ブルーカーボン」で、海草藻場、海藻藻場、干潟、湿地、マングローブ林などのことである。これらは世界中の海の面積のたった0.2%しかないが、海全体で吸収する二酸化炭素の50%を占めている。ウニで磯焼け（ウニが異常繁殖し海藻を食べつくした状態）して藻場がなくなってしまうと、ブルーカ

ーボンによる二酸化炭素の吸収もなくなってしまうので、地球環境に深刻な影響をもたらす。では、解決策としてウニを捕獲して食べればよいと考えるだろうが、実は内臓がスカスカの瀕死状態のものばかりで食用にもならない。

私たちは、「ブルーカーボン」の再生を目指すという高い目標を掲げ、ウニの生態を調べ始めたが、長期的な観察が必要になるのでぜひこの研究を引き継いでほしい。

⑥テーマ：スポ GOMI

体を動かしながら街をきれいにすることをテーマに活動している。その中で制限時間内にごみを拾い、その重さや種類でポイントを競う「スポ GOMI」というスポーツに出会った。自分もスポ GOMI を企画・運営することを目的として活動した。

大会を開催するためのルールと必要な道具の確認、会場の選定を行った。広野町内のゴミが落ちている状況を調査したが、ゴミが落ちているような所はなく、打ち上げられたゴミがある広野海岸に設定した。プレ大会としてゼミのメンバー10名で実施した結果、大量のゴミを回収することができ、課題も明確になった。スポ GOMI を行っている NPO 法人に連絡を取り、運営するためのポイントを再確認することができた。今後は、もう少し規模を大きくしたスポ GOMI を開催したいと考えている。



⑦テーマ：葛尾村に人を呼ぶために

過疎化と高齢化の進んだ葛尾村に対して、多くの人に村の存在を知ってもらい魅力を発信したいと考えている。そのための活動として、ゼミ生を対象に葛尾村キャンプを実施した。参加者からは葛尾村の魅力に触れることができたとの感想をもらっていた。今後は、バイクのツーリングツアー実施のため、インタビューや動画撮影を予定している。

(3)課題と展望

今後もお互いが協力して、各グループの探究活動を進めていきたい。また、「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を実現できるように継続的に努力していきたい。

2. 2. 3 アグリビジネス探究ゼミ

「地域の現状をビジネスや生業の観点から調査し、風評払拭や新たな地域活性化の方策について探究する。」を目標に活動している。

(1) はじめに

メンバーは6名で、スペシャリスト系列農業が5名（男子1名、女子4名）で、残り1名（女子）は、スペシャリスト系列商業の生徒で構成されている。テーマについては、個人または、グループで自由に設定させた。

(2) 実施内容

テーマ及びキーワードは、次の通り。

テーマ	キーワード	編成
檜葉の特産品をつくる	檜葉町、六次化産品、地域の活性化、風評払拭、さつまいも、ゆず	個人
オリーブを使って町おこし	六次化産品 オリーブ	個人
大熊町を応援しよう ～いちごやキウイを使ったスイーツ開発～	大熊町、六次化産品、地域の活性化、風評払拭、いちご、キウイ	個人
小麦アレルギーの人でも食べることができるお菓子作り ～米粉を使った食べ物～	小麦アレルギー、六次化産品、風評払拭、米	個人
美容を活かして食品廃棄物を減らそう ～おからの有効利用～	美容、六次化産品 おから	グループ

(2) 成果

① 檜葉の特産品をつくる

檜葉町の特産品である「さつまいも」を使用して商品開発を行った。株式会社マルト商事と連携し「さつまいもパン」を商品化し、市内のマルトで販売を行った。

今後は、檜葉町特産の「ゆず」を使用したお菓子の商品開発の予定である。



② オリーブを使って町おこし

広野中学校の御協力で、広野中学校グラウンドで栽培しているオリーブを収穫し、「オリーブを使ったラスク」を製造した。出来上がったラスクを広野中学校教頭やいわきオリーブプロジェクト代表松崎康弘氏に試食をしていただきアドバイスを受けた。今後、商品化に向けて継続研究中である。



③ 大熊町を応援しよう

ネクサスファームおおくま徳田辰吾氏の御協力で、大熊町産のいちごをいただき、フルーツドライに加工して「いちごマドレーヌ」を製造した。「いちごマドレーヌ」は、大熊町で開催された「標葉祭」で販売し、アンケートを実施した。

また、HAMADORI 13の佐藤亜紀氏の御協力で、大熊町産のキウイをいただき、フルーツドライに加工した。今後、キウイを使用したマドレーヌを製造する予定である。



④ 小麦アレルギーの人でも食べることができるお菓子作り

フロンティア広野芳賀吉幸氏の御協力で、広野町産の米をいただき、煎餅を試作した。今後、商品化に向けて継続研究中である。



⑤ 美容を活かして食品廃棄物を減らそう

「おから」が美容に良いことを調べ、「おから」を使用したスイーツづくりを行った。今後試作を継続し、いわき内の豆腐店の店主にアドバイスをうけ、商品化を目指す。



(4) 課題と展望

自分で商品を企画し試作を行っているが、どうしてもレシピの完成度および製造技術が不十分で思うように進んでいないのが現状である。しかし、自分自身、失敗を繰り返して学んでいく姿勢が探究活動であると考えている。

少しずつではあるが、見た目や味について改善されてきており、確実に商品化に前進している。

これまでの活動を通して、自ら地域の方々とコミュニケーションを取り、原料を入手し、イベントに参加するなど、多くの経験を通して深い学びができたと考えている。

2. 2. 3. スポーツと健康探究ゼミ

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から12年を迎えようとしている。この12年の間には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開、浪江町や富岡町、大熊町の居住制限区域の減少など、復興が進み、明るい話題が増えてきた。

一方で、震災や原発問題の余波もいまだに残り、不自由な環境で生活を送っている人々がまだたくさんいる。また、新地高校と相馬東高校が合併し、相馬総合高校になるなど、人口の減少には歯止めがかからない。さらに、未だ新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、震災からの復興を目指すスピード感に影響を与えた。

これらの地域課題に対して、スポーツを通して何ができるのか、について昨年までのスポーツと健康ゼミではアクションを行ってきた。しかし、ここ数年新型コロナウイルス感染症の影響で多くの人と触れ合ったり、一緒に活動するなどのアクションができず、思い描いていた探究活動ができていなかった。また、自分の得意とするスポーツを地域課題の解決のアクションとどのようにつなげていくかを考えていくと、活動の幅が狭くなり、充実した探究活動がやりくいことも課題となった。そのため、今年度から地域課題とスポーツを結びつけることの他に、自分自身の競技力向上にも目を向けた探究活動も可能ということとした。

(1) はじめに

スポーツを通して持続可能で豊かな地域の実現を探る他、競技力向上、障害の予防などトップアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行い、グローバルリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容

① 自分と向き合うためのアクション

自分は何に興味があるのか、「マイキーワード」を探るため、マンダラート、問いづくり、担当教員との座談会などを通して、自分の興味に合ったゼミを決める活動を行った。その中で、同じテーマに興味を持つ者同士でグループになったりしながら、自分の探究活動のテーマを決定していった。

② 調査、アクション

テーマ決定後も担当教員と対話を繰り返し、「このテーマのゴールは何か」「そのための仮説は何か」「どのようなアクションが必要か」など、探究の内容を深めていった。対話を繰り返す中で、テーマやグループが変わった生徒もいたが、それを否定せず、生徒の自主性を尊重して活動を進めた。

その後もアクションが思うように進まない生徒に対してはこちらから寄り添い、できる限り生徒主体になるような支援を心掛けてきた。

腰のケガを減らそう



腰痛に悩むバドミントン選手が多いことから、腰痛を減らすにはどのようなトレーニングやストレッチを行ったらよいのかについて、アンケートやインタビューを行った。

This is football

広野町にサッカーを広めるための活動を様々な方向から考えた。まずは男子サッカー部の活動や本校のサッカー場についてより多くの町民に知ってもらうためのアクションを立案した。



パフォーマンス向上とケガ防止のためのトレーニング

野球選手の投げる、打つ、などのパフォーマンス向上及びケガ防止のためのトレーニングについて、様々な文献や動画を元に検証を深めた。



SKAメソッド

ロングキックの飛距離を伸ばすためには、どのような要素が必要なのかを探り、どんなサッカー選手でもロングキックの飛距離が伸びるためのメソッドの開発を目指して活動した。



メンタルの状況はスポーツにどう影響する？



自分の体験から、メンタルの状況がトレーニングやゲームにどのような影響を及ぼすのかについて探求を深めた。アプリを使用して自分の精神状況をグラフ化したり、専門家から話を聞いたりしたことをまとめた。

サッカー選手の補食づくり

サッカー選手に必要な栄養素が含まれた補食はどのようなものがふさわしいか、というテーマについて研究した。ゲームやトレーニング前に、何を、どれくらいとるとパフォーマンスを落とさずにプレーできるかなど、様々な文献を元に検証した。



日本選手と海外選手のバドミントンへの取り組みの違い

海外のバドミントン選手がなぜ強いのか、について興味を持ち、日本選手が海外選手に勝利するためには何を向上するべきか、日本選手と海外選手のバドミントンへの取り組みで何が違うか、インタビューやアンケートを通して検証した。



女性アスリートの貧血と月経について

自分のように、貧血に悩むアスリートを少しでも減らしたいと思い、女性アスリートの貧血と月経の諸問題について解決のためのアクションを立案した。



障がい者と交流する場所を作る

障がい者と触れ合う場所が少ないことに注目し、スポーツを通して誰もが楽しく触れ合える場を作ることを目指した。アンケートを元に調査を進め、まずはプレイベントを実施し、その後さらに大きなイベントの計画を実施するための計画を立案した。

高校生アスリートが求める食事は

寮生活を送る中で、普段食べている寮食がアスリートにとって望ましい味付けや栄養素が含まれているのか疑問を持ち、寮生にアンケートを実施したり、栄養士や医師にインタビューをしたりして、望ましい食事の実現を目指して活動した。



スポーツブランドを通して地域を盛り上げる

双葉郡の魅力をスポーツを通して広めたい、と考え、本校を会場にしたイベントの立案をした。いわき市にあるアウトドアブランドと連携し、実際に会社へ行き、様々な製品に触れる中で、このブランドの良さを広めること、スポーツの楽しさを味わうことを中心としたイベントの実現を目指して活動した。



アスリートの障害の再発予防プロジェクト

アスリートに多い靭帯損傷を防ぐためのトレーニング立案を進めていく中で、靭帯損傷だけではなく、アスリートのためのケガをしない、又は再発しないためのトレーニングや運動の研究を進めた。



野球の楽しさを広めたい



野球の歴史を調べ、なぜ野球が日本で受け入れられたのか、また、野球選手のパフォーマンス向上のためにはどのようなトレーニングが必要か、などについてそれぞれで調査した。探究を進める中で、「野球を多くの人に楽しんでほしい」という思いが強まり、協力して活動を進めることになり、小学生に野球に親しんでもらうための活動を考え、実践した。

アスリートに必要な栄養素が含まれた手軽に作れる副菜作り

アスリートがトレーニング後の疲れた状態でも、手軽な調理で簡単に必要な栄養を補給できる副菜について研究を進めた。



できるだけ調理器具を使わず、短時間でできる料理を様々な文献や動画を参考に調べ、実際に簡単に調理できるかを検証した。

(3) 成果

本ゼミに所属する生徒は、トップアスリート系列として日頃からスポーツに真摯に取り組んでいる。そのため、地域課題と自分の専門種目を結びつけるより、競技力向上や障害予防、スポーツを広める、などの方がより自分事として捉えられるため、昨年度よりも自分で考えて行動する生徒が増えてきた。また、外部のどのような人材と連携して探究を進めればよいか、今までの自分のスポーツ活動の中で知り合った人が身近にいる場合もあり、より調査が進めやすくなった。アンケートの対象も自分が所属する部員や寮生など、立案してすぐに実施できるような環境であったため、一人ひとりが自分の役割に責任を持って取り組む姿勢も感じられた。その結果、本ゼミからマイプロに応募し、受賞した生徒もいた。また、地域課題とスポーツを結びつけたグループに関しても、身近に地域型スポーツクラブがあったり、Jヴィレッジでたくさんのスポーツイベントを手掛けてきた方から助言をいただいたりすることができ、アクションが起こしやすい環境にあることも意欲的な活動につながった。

(4) 課題と展望

一方で、「競技力向上」「ケガの予防」「アスリートの食事」など、すでに多くの専門家が検証し、実証しているテーマでもあるので、自分たちのアクションをどのように仮説を立て、実証していくか、で悩み、なかなか進展しない生徒やグループもあった。科学的なデータを取るためにはより専門的な知識と施設が必要になり、探究活動で実践するには限度がある。教員もそれぞれの探究活動のゴールから逆算して考えるように何度も対話を繰り返し、アドバイスをしてきた。本当にこのテーマで探究活動を進めてよいのか、活動を進めていく中でゴールからずれて不安になり、何から手を付けてよいか悩んでいるグループも多かった。また、トップアスリート系列の生徒は、長期休業中の練習日程や試合などの関係で、思うようにアクションに取り組めないことも多い。さらにグループ活動になると、グループ内で積極的に活動する生徒と、それに依存してしまう生徒もいる。「まずはアクションに取り組んでみよう。」と生徒に寄り添いながら生徒の活動を見守ってきたが、アクションを実施しなければゴールには近づかない。以前よりもトップアスリート系列が取り組みやすい状況にはなったが、より担当教員で連携して進捗状況を確認し、見守り、声掛けのバランスを考えながら支援していきたい。この活動が、競技力向上に役立つことのほか、アスリートのセカンドキャリアにも役立つものであることは間違いない。その意味でもトップアスリートの探究活動の在り方を今後も試行錯誤していく。

(3) 生徒のプロジェクトと活動内容

「LGBTQ を身近に感じよう」

演劇部で LGBTQ の要素が入った内容を演じたことで興味を持ち探究を始めた。いわき市役所職員猪狩僚さんの紹介で「さんかく交流会」のメンバーと交流し地域の「LGBTQ」の状況について知った。今後は LGBTQ を認知してもらうためにパンフレットを作成する予定。



「パラスポーツの認知度を上げるためには」

パラスポーツに興味があったことと、オリンピックで認知度が上がったパラスポーツではあるが高校生の認知度はあるのか等の疑問から探究が始まった。福島パラ陸上競技会事務局齋藤さんのご協力のもと実際に田村市陸上競技場に行き、パラスポーツで使用する車椅子体験をしたり、本校にてポッチャ体験を行ったりした。今後は「高校生のパラスポーツに対する認知度調査」を通してパラスポーツの認知度を上げるアクションを考える予定。

「HSP を知ろう」

自分自身が HSP であり、この症状の生きづらさを知ってもらいたいということから探究が始まった。自分と同じ悩みを持つ人のために HSP 診断表を Google フォームで作成し、高校生の認知度を上げようとしている。今後は SNS のコミュニティを作り話し合い予定。

「私たちにできること～子供のために～」

子供好きな女子生徒2名が、コロナ禍で好きなことができず子供の自律神経が乱れていることに着目し、認定こども園「ひろのパーク」にて保護者へ大規模なアンケートを実施。食事の好き嫌い困っている保護者が多く、これが自律神経に関係あるのではないかと子供の好き嫌いが減る食事メニューを試作する。ピーマンのレシピを考案中。

「よりよいメンタルヘルスを」

職場や学校など環境が原因で心の病を発症する現代に着目し、心の病にならない優しい社会にするに

はどうしたら良いか、という疑問から始まった。学校カウンセラーや養護教諭へのインタビュー、ストレスチェックシートの作成、アンケートを実施し、それらの分析を通して現代のストレスについて考える。今後はメンタルヘルスについて座談会を行う予定。

「運動が苦手な子供はどうすれば動くことを好んでくれるのか」

自分自身が子供の頃運動が嫌いであったため子供が運動を好み自分から運動を始めるにはどうしたらよいか？という問いから探究を始めた。自身の通っていた保育園への聞き込みや富岡わんぱくパークを見学した。

「双葉郡と愛」

将来ブライダルプランナーを志望している生徒と「愛」について考えてみたいという生徒が集まり3人に行っている探究である。高校生や教員に「愛に関するアンケート」を実施し実態を調査する。ララチャンスいわき、ベルヴィ郡山館にてインタビューを実施し、今後は葛尾村の祝言式を運営する予定。

「嫌われがちな食材はどうやったら食べてもらえるのか」

福島県の肥満率がワースト上位であることを知り、偏った食生活を少しでも直し健康になってもらいたいということで探究が始まった。水口栄養教諭にインタビューし栄養について学び、子供が苦手とする野菜を使ったレシピを考案する。

「この世はカラフルだ！」

言語や年齢関係なく性的マイノリティについて多くの人に伝えるために私ができることは？という探究目標でスタートする。本校生に対して LGBTQ に関する大規模なアンケートを実施し、さんかく交流会や磐梯山観光職の金光弦太さんとの対話を通して、言語や年齢関係なく性的マイノリティを理解してもらえる方法を探す。今後も性的マイノリティの方や支援団体の方々との対話を大切にしながら絵本を製作していく予定である。



2. 2. 4 探究活動整理のための発表会

10月25日に2年次の探究のプレ発表会を行った。目的は以下の4つである。①これまでの活動を通しての学びや今後の課題を振り返り、発表という形で表現することにより、他の班の探究班の生徒たちと共有し、探究活動の意識の高揚を図る、②探究テーマ(問い)を明らかにした先にある、自らが考える「地域・社会のあるべき姿」と課題解決に向けて実践したアクションや、構想中のアイデアを報告する、③地域の方から意見やアドバイスを受けることにより、今後の実践を具体的に落とし込む機会や個別に地域の方から協力を得る足がかりとすること。④まとめに入っている3年次生や教員からの意見やアドバイスを受けることにより探究ゼミの縦のつながりを強くする機会とする。地域のアドバイザーとしては、以下の方々にお越しいただいた。

氏名	所属	地域	関連領域
岩田 雅光	アクアマリンふくしま	いわき	再エネ
山根 辰洋	一般社団法人双葉郡地域観光研究協会	双葉町	メディア、原子力
猪狩 琉依	富岡わんぱくパーク	富岡町	スポーツ、福祉
平山 勉	双葉郡未来会議 代表	富岡町	メディア
日比 賢二 新國 宏樹	廃炉資料館	富岡町	原子力
佐藤 亜紀	HAMADOORI 13 事務局	大熊	アグリ
猪狩 僚	いわき市役所、Igoku 編集長	いわき	メディア、福祉
秋元 菜々美	一般社団法人双葉郡地域観光研究協会	富岡町	メディア、福祉

(1) 発表準備

発表時間とアドバイザーからのコメント、対話に多く時間を割けるように、Zoom 接続による全体での開会をやめ、各会場ごとに最初から最後まで進行する形で計画を立てた。3年次生徒は最終発表を終え、論文作成に取り掛かる段階だったため、希望を取ったうえで自由参加とした。

発表の項目として以下の7つの点を示した。

- ①探究テーマ、そこに至った経緯
- ②どんなアクションをしてきたか
(調査のためのアクション、課題解決のためのアクション)
- ③自分が考える「地域・社会のあるべき姿」
- ④アクションする前後でわかったこと、気づいたこと、学んだこと、新たな仮説
- ⑤自分の考え方や姿勢にどのような変化があったか
- ⑥今後の「課題解決のためのアクション」の内容、計画
- ⑦現在の悩み、壁、相談したいこと

(2) 実施内容

発表件数は原子力防災ゼミ7件、メディアコミュニケーションゼミ18件、再生可能エネルギーゼミ7件、アグリビジネスゼミ5件、スポーツと健康ゼミ15件、健康と福祉ゼミ11件。合計63件となった。

発表者をプロジェクト内容に基づきゼミを横断して11会場(A~K グループ、1グループにつき5~6プロジェクト)に分け、発表を行った。1プロジェクトの発表につき10分(6グループ会場:発表5分、ディスカッション5分)、または12分の時間を取った(5グループ会場:発表5分、ディスカッション7分)。



(発表の様子)

(3) 成果

発表会が探究のマイルストーンとなり、生徒の刺激となったとともに、アドバイスによって探究のブラッシュアップがされた。アドバイザーの提案で、発表者全員を後日引率して外部接続をさせる機会を設定する会場もあった。また早稲田大学の山田研究員にもアドバイザーとして入っていただき、資料提供・外部接続の機会をいただけた。

2. 2. 5 コラボ・スクール 双葉みらいラボ

コラボ・スクール双葉みらいラボは、生徒たちが放課後に集うコミュニティスペースである。学校と地域の「潮目」の場所として大学生や社会人、地域の大人たちとのナナメの関係に溢れた生徒にとっての学びの場となっている。そこは生徒たちの安心・安全な「居場所」であり、様々なことを挑戦できる「ステージ」でもある。

2019年の新校舎移転と共にプレハブ校舎から学校内へ移って4年目を迎え、様々な法人・個人のご寄付に支えられながら、認定NPO法人カタリバのスタッフが常駐、運営。学校と協働しながら地域協働スペース、協働学習ルームを使用し、平日の放課後から20時まで運営が行われている。

(1) はじめに

コラボ・スクール双葉みらいラボは、校内の地域協働スペース内に設置。生徒が自学自習に取り組む協働学習ルーム、生徒が交流の場や居場所として用いる地域協働スペースがある。

また施設内には「カフェふう」が併設されており、地域交流の起点として、卒業生や地域の大人など年間延べ500名以上が来館し、多様な人材が生徒に関わる場所となっている。

(2) 取り組み内容

○居場所支援

カタリバのスタッフがユースワーカーとして常駐することで、コミュニケーションを通して意欲喚起の土台となる「安心安全なセーフプレイス」をつかっており、生徒の日常や進路に至るまで、思春期世代特有の複雑な悩みを相談できる場となっている。

また、探究学習におけるアクションの個別相談、定期考査前の福島大学と連携した大学生ボランティアによる学習支援なども行っており、生徒の主体的な学びをサポートする場としても機能している。



～双葉みらいラボでの居場所支援・学習支援の様子～

○地域との連携・協働

新型コロナウイルス感染症による活動の制限も緩和されつつある中で、生徒主体で地域の方と打ち合わせやイベントをともに実施する姿が再び多く見られるようになった。そのような機会によって生徒と地域の方が出会い、活動の場が地域へと広がっていく事例も多く見られた。また、「生涯学習施設」としての観点から、今年度は地域向けに映画上映会や、芸術・建築・科学・まちづくりなどの様々な分野で活躍されているゲストを招いた対談イベントなど、これまで学校や生徒とはつながりがなかった方も参加できるコンテンツを多く実施した。中高生だけでなく大人も探究し学び、そしてつながる場としての役割を強化することで、結果的に生徒にとっての「学びの土壌」を耕すこととなると確信している。また、このような機会に来館された地域の方

が、学校の探究発表会の審査員等の教育課程内の活動に参画してくださるなどの事例も生まれている。



～地域協働スペースを通じた地域の方々との交流の様子～

○未来創造探究のサポート

全学年で取り組まれる「未来創造探究」のサポートを行っており、カタリバのスタッフが「未来創造探究」の授業にアドバイザーとして教員とともにゼミ運営を行っている。具体的には、地域の大人や外部の機会へのコーディネート、生徒同士の議論のファシリテート等を通して、生徒の多様な学びを作るサポートを行っている。

また、生徒が活動に対するフィードバックを受けられる場として、「社会貢献活動コンテスト」「ベネッセSTEAMフェスタ」「全国高校生マイプロジェクトアワード」などの外部機会に生徒を送り出す支援もしている。

加えて、今年度は県内外から総合的な探究の時間のカリキュラム作りに取り組む高校の教員研修の受け入れも行った。今年度はトライアルながら4度実施し、5校16名の教員・役場職員・コーディネーターが参加し、本校の取り組みを現場で視察した後、次年度の探究カリキュラム作りをワークショップ等も交えながら行った。

(3) 今後の展望

双葉みらいラボには、今年度約7,800名の生徒が来館している。今後は、今年度に引き続き、地域の方や多様な分野で活躍される方が学校に来るきっかけを作り、生徒と大人、大人同士の出会いの機会を創出していく。またその中で生まれる生徒の学び、地域の変化について、定量的なモニタリング等も行うことを通して、「学校」という施設やその教育活動における存在意義を深めていきたい。

2. 3. 1 未来創造探究の概要

総合的な学習の時間の中で、3単位を未来創造探究として実施した。そのうち1時間は主として自らを見つめ、進路実現のための時間として、残りの2時間を探究活動として実施した。2年次に引き続き、3年次においても6つの探究ゼミに分かれ、グループや個人でテーマを設定し、実践を行った。昨年までと比較して、最終発表会後の論文作成に力を入れ、論文作成を通じて自分の探究の理解を深めることを重視した。

(1) 3年次の探究活動概要

4月26日 中間発表

5月～9月 各班、グループに分かれて探究

活動

9月24日 未来創造探究生徒研究発表会

10月～1月 論文作成

(2) 実施内容

① 中間発表

3年次の探究の進捗状況を確認することも踏まえ、まず4月に中間発表会を行った。今年度は発表というよりはむしろ、聴衆と議論をしながら、今後の探究のヒントを得ることを重視した。また、新2年次を招き、2年次がこれから取り組む未来創造探究のイメージが付きやすくなったともに、新たに赴任して探究担当となった教員にとっても、概要を伝えられるようになった。

② 探究活動

6つのゼミに分かれて探究活動を行った。各ゼミの構成は以下のとおりである。

探究ゼミ	プロジェクト数	担当教員人数
原子力防災	18	4
メディア・コミュニケーション	18	4
再生可能エネルギー	5	3
アグリ・ビジネス	4	3
スポーツと健康	17	4
健康と福祉	8	2

③ 未来創造探究発表会

「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。各分野の第一線で活躍されている方（専門知を持つ方）、地域の課題に取り組んでいる方（地域知を持つ方）を審査員兼コメンテーターとして呼びし、各賞を設定した。

今年度は高校70PJ、中学15PJとプロジェクト数が増加した。昨年度の反省もあり、発表会は「8分程度の発表時間」「高校はコンテスト部門と審査部門に分ける」等の改善を行った。特に、コンテスト部門と審査部門に分けたのは、賞のための発表会ではなく、あくまで探究を深めるための発表会という位置づけにし、審査委員も教員も余裕をもって内容を吟味するのが狙いだ。また、生徒にとっても自主性を高めるきっかけとした。

全体会においては審査員の松岡俊二先生と田村学先生から講評を頂き、コロナ渦での探究活動に

一定の評価を頂きつつも、問いの更新、考察、文献調査等において更に探究を深めていく手法について課題をご指摘頂いた。

④ 論文作成

発表会終了後は、探究内容を深めるため論文の形でまとめていった。今年度は論文指導を強化し、全体での論文作成ガイダンス、ゼミ担当者月次会（数回）、中間締切のリマインド（数回）、論文作成進捗確認シートの作成等、生徒が論文作成をするに当たってのゼミ担当者の指導方法に関する情報共有を強化した。

構成は目次・要旨（アブストラクト）・内容（動機・目的・仮説・検証方法・解決アクション・結果）・考察・探究で得た成長・謝辞・参考資料、とし、特に考察および参考資料の提示を促し、先行研究に基づいた自分なりの分析をすることで、探究の深化を狙った。分量は6,000字～10,000字とし、一定量を書きつつも、冗長にならないよう、各項目についてコンパクトにまとめさせた。12月中旬を一次締め切り、ゼミ担当者のフィードバックを経て1月下旬を最終締め切りと定めた。

(3) 評価と課題

感染症の影響による大きな制約の中でも、多くの生徒が地域や実社会の課題を「他人事」ではなく「我がこと」として捉え、主体的に取り組んでいた。実践に踏み出し、地域で新たな価値を創造した事例や、探究を通じて自身の生き方を見出し、進路へと向かう姿勢は高く評価できる。

一方で、課題設定、調査やデータ、考察の言及が少なく、「活動報告」と見受けられる探究が依然と多い。「やってみた」だけでは探究とはならない。自身の実践を、書籍や教科から得た知識と結び付け、抽象化して全国・世界の課題とも重ね合わせて考察を行い、地域や社会を揺り動かす新たな知の創出や、未来に向けた提言へと至るような活動を今後は期待したい。

2. 2. 2 原子力防災探究ゼミ

23名の生徒が原子力防災探究ゼミとして活動を行なった。2年次に設定したテーマについて、今年度は更なる調査や課題解決に向けた実践を重ねた。設定時には、地域コミュニティの再生を中心に、原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究するというゼミ全体テーマと合致しないテーマが一定数あったが、それらについても、活動する中で地域住民・団体との協働などが多く見られ、結果的に地域社会のあり方を考える機会が得られた。

(1) はじめに

昨年度の原子力防災探究ゼミ発足時、生徒個々の興味・関心を出発点としたテーマ設定を重視した。それぞれの生徒が、自らの興味・関心が地域の抱える課題の解決にどのように生かせるのかという視点でテーマ設定を行なった。その結果として、例年以上にテーマは細かく分かれ、全て個人または2名によるプロジェクトとなっている。

(2) 実施内容

基本的には2年次の段階で設定したテーマで引き続き探究活動を進めた。テーマについて軌道修正する者や再検討する者もいたが、それらの生徒についても2年次でテーマを設定する際に行った自身の興味・関心の検討や、そこまでに行ってきた前テーマでの活動が生かされる形でテーマの再設定が行われた。ある程度探究活動が進んだ状態で迎えた今年度は、各プロジェクト（個人・チーム）の進捗状況に応じて、教員が個別にフォローする体制がとられた。年度の前半は、積極的に外へ出て調査や実践を重ねる姿が見られた。そうしたアクションについては、ほとんどの生徒が夏休み明け頃までに一区切りをつけ、その後は多角的に考察したり、表現したりする段階に入った。9月の未来創造探究発表会、そして論文執筆を通し、2年にわたる探究活動をまとめた。

(3) 成果

3年次になると、各プロジェクトともこれまで以上に考えながら行動する姿が見られた。2年次から積極的に地域へと活動の場を広げていった生徒たちであり、その積極性こそ彼らの強みであるが、一方で、十分な検討や準備が不足していた面もあった。それが3年次では経験の積み重ねや反省から、調査や実践の前後でしっかりと思考する姿勢が伴ってきた。また、仮説通りに活動が進まなかったときでも諦めずに新たな方策を検討するしなやかさ（レジリエンス）が備わってきた。試行錯誤こそ探究の醍醐味であると考えられるが、生徒らは活動を通してそれを堪能したと思う。

【主なテーマ・プロジェクト】

①子どもの社会参画の場を創出することをテーマと

したプロジェクトは、双葉郡8町村小学生交流イベントの開催を中心に探究活動を展開した。この交流イベントはこれまで郡内小学校教員を中心に企画・運営がなされてきた。本プロジェクトでは、教員らで構成する実行委員会に対し、中学生を企画・運営側に加えるよう提案し、中学生実行委員会を組織することに成功した。中学生らは、小学生時代に交流会へ参加しており、その経験を生かし今回は企画側として参画することとなった。これは、中学生が企画実行による達成感を味わうことと、社会に参画することへのハードルが下がることを期待して行われた。新型コロナウイルス感染症の拡大により、交流イベントは実施直前で中止となってしまったが、新たな体制を次年度以降へ引き継ぐことができた。本プロジェクトに取り組んだ生徒は、学校内外の様々な場面で一貫して子どもの参画を重視した活動を行い、生徒会活動においても生徒主導の校則改正に大きく貢献した。

②アレルギーに対応したスイーツを地元企業



と共同開発したプロジェクトの出発点は、原発事故以降苦境に立たされた地元の農産品販売に貢献したいという思いだった。南相馬市出身の生徒2名が、地元産品を使った商品開発を目指し、調査や試作に取り組んだ。災害用非常食に、地元産品を取り入れることはできないかと考え、非常食に関するアンケート調査を実施したところ、調査結果からは、被災者自身がなかなか選ぶことができない非常食にアレルギーへの配慮を求める意見が一定数あることが分かった。そこで、アレルギーに対応した非常食、なかでも非常時に精神的な安らぎを与えられるものとして甘味（スイーツ）の開発に取り組んだ。非

常食という性質上、長期保存が基本とされるため、こういった食材が、またどのように加工するのが適して



いるのかというところで、

大きな壁にぶつかることとなった。活動が停滞気味になったところで、地元スーパーに相談する機会を得られた。非常食の開発は難しいものの、アレルギーに対応したスイーツを共同で開発するというのであれば、スーパーとしても協力できるという申し出をいただいたことで、テーマの修正を図った。その後、スーパーの担当者に加え、地元洋菓子店の協力を得て、数回にわたる検討会と試作会を繰り返し、完成したスイーツを一週間にわたってスーパーの店頭で販売した。最終的に、いわき市や双葉郡の地元産品を使用すること、アレルギーに対応した商品を一般のお客様に提供することまで実現できたのは、活動の途中においてぶつかった課題にしなやかに対応できるチームワークがあったからと評価できる。

③将来医師を志す生徒が、医師不足という問題を抱えた地域医療の現状を、AED（自動体外式除細動器）の普及によって改善していくというプロジェクトにとりくんだ。前半は、医師との対話等を繰り返し、日本の医療、地方の医療が抱える課題について、考えを深める機会を得た。一方で、地方の抱える医師不足といった問題が、福島県で顕著になっている問題ではあるものの、全国のどの地方でも見られる構造的な問題でもあり、その解決のためには国や地方公共団体、そして医学部をはじめとする医療従事者を養成する大学等が中心となって取り組まなければ、解決の難しい大きなテーマであることを再確認させられた。そこで、現在の一住民の立場から、少しでも地域医療に貢献できないかと考えた際に、AEDの可能性を探っていくこととなった。日本は、人口あたりのAED設置率こそ世界トップクラスであるものの、実際にAEDが使用されているのは必要な事態の5%に過ぎないとされている。そこでAEDの意義、設置箇所、使用方法について、多くの人に広めていく活動に取り組んだ。校内に設置されているAEDについても、アンケートの結果、設置箇所を正確に把握している者は少なく、

いざという時に使用できる状況でなかったため、校内各所に最寄りのAED設置箇所とそこまでの経路を矢印で示す表示を掲示した。これにより、教員・生徒だけでなく、校舎を利用する全ての人にとってAEDの場所が明らかになった。また、防災避難訓練の機会を利用して全校生徒に対しAED活用の意義を説いたり、AED製造企業や救急救命士を目指す本校OBの大学生らと協働してAED講習会を催したりするなど、校内において積極的な啓発活動を展開した。一方、校外においても、各種発表会で本テーマでの活動を紹介することでAEDの啓発活動に努めるとともに、見てくださった方々からは多様な視点でのフィードバックをいただき、それをまた活動へと反映させていった。本探究は、自身の将来の夢につながるテーマであり、本人にとっては高校卒業後も継続していく探究となっている。探究が自分自身の夢や目標を深く考える機会になったり、一生かけてやり続けたいと思えるテーマに出会える機会になったりする、好事例であったと言える。



(4) 課題と展望

生徒の興味・関心を出発点としてテーマを設定しているため多様なテーマ設定となったが、これまで一定数あった廃炉や事故後の処理についてのテーマが生徒らの関心と結びつかない現状は、事故からの時間の経過が一因としてあるだろう。一方で、こういったテーマであれ、この地域においてこの地域に暮らす人たちが協働したり、この地域の他の課題について考えを深めたりすることは、どこかで震災や原発事故との関わりを持っている。震災や原発事故が出発点でなくても、そこと繋がった時にどう考えを深めていくことができるのかが、今後のゼミ運営の課題かと考える。

今年度は、順調に活動が進まなかったときの生徒の頑張り（踏ん張り）が目立った。簡単に解決しない課題だからこそテーマとしたわけではあるが、昨年度までは一度行き詰まると活動がそのまま停滞し続けることが多く見られた。今年度は、実践の形を変えて再度挑戦したり、テーマの修正を図ったりと、試行錯誤しながらも前へ進もうとする姿勢を見せ、その点は大きな成長であった。

2. 3. 2 メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下メディアゼミ）は、双葉郡を中心とした地域が抱える課題に対し、情報の発信や過去の記録（アーカイブ）といった手法を通して、その解決に向けた活動を行っている。メディア・コミュニケーションという枠を超えたテーマを設定し探究活動に取り組む生徒も多く、25名（男子5名、女子20名）が在籍している。

(1) はじめに

震災について「ほとんど覚えていない」と本ゼミ生の大半が語る。これは、震災当時彼らが未就学児であったことに起因する。これまでの探求では、自身の経験した「ストーリー」に基づいたテーマ設定が主であったが、これまで家庭や学校で得た学び・双葉郡の地域課題について考察した高校1年次での活動などによる、客観的知識に基づいたテーマ設定が顕著となる。伴って、彼らに寄り添う我々アドバイザーの関わり方も、柔軟な変容が求められる。

前述のことに由来して、震災・原発事故からの復興や風評被害の払拭といったテーマが減少し、双葉郡の魅力の開発・発信や、他地域も抱える課題に対し双葉郡を活用して解決に取り組むなど、多様なテーマが設定されている。

(2) 実施内容

①話せばわかる、話せば変わる～いわきを越えた学びを通して～

震災と原発事故で様変わりした双葉郡を知るために、様々な活動に参加した。特に大学のシンポジウムに参加して、交流する中で、固定観念に捕らわれず、世代を超えた交流をすることができた。そして新たな目標・課題が見つかった。

②ふるさとを大切に

ふるさとを大切にしたいという思いから、多くの人がふるさとに誇りを持ち、貢献したいと思えるような活動を行った。出身中学校の生徒を対象にアンケートやワークショップを行い、ふるさとについて考えるきっかけ作りをすることができた。



③絵本を作って、東日本大震災を伝承する

オリジナル絵本を作り、たくさんの人に東日本大震災の知識や記憶などを伝承したいと考えた。完成した絵本を本校図書館、相馬市立図書館、南相馬市立図書館の3カ所に展示し、読んでい



ただいた方にアンケート調査を行った。

④生理によりそう探究

生理の貧困をテーマとし、問題を解決するため、アンケートを行い、関係する教員と協議しながら、本校のトイレに生理用品を設置するアクションを行った。活動の中で、トイレに生理用品を置く活動を持続させるためには、企業と連携するという方法もあるという新たな視点に気づくことができた。



⑤発達障害と療養

発達障害のことを調べてみると、その解説の多くが難解でわかりにくい。そこで、どのようにすれば、多くの人に発達障害のことが理解されるか、また療育施設について理解が進むのかを探求した。

⑥浜通り×聖地巡礼

浜通りの観光客増加のために、アニメ等コンテンツの聖地巡礼を取り入れることで、観光客が増え、双葉郡の魅力を伝えられるのではないかと考えた。双葉郡をイメージしたオリジナルキャラクターを作成し、文化祭で展示した。



⑦男性保育士に対する差別や偏見を減らす

保育の魅力を発信している横浜バーンの方々や男性の保育教育実習生、出身幼稚園の教諭らと交流し男性保育士の置かれている状況について調査した。性別による差別や偏見について、現場の状況を知るとともに、その払しょくのための解決方法について考えを深めることができた。

⑧救いたい小さな命

最近のペットブームから殺処分をキーワードにして、飼い主のあり方、自治体や民間団体の取り組みなどを電話などから調査し、子供たちにもこの問題について考えてもらえるよう絵本を作り、啓発活動を行おうとした。

⑨孤食 ～今の子供たち～

一家団らんの食事が大切だと考えているので、1人で食事をとる子供が増えている事は大きな問題で

あると考えた。アンケートをとると、家族の生活が忙しくばらばらな状況と、子供が一家団らんを避ける傾向の2つが見えてきた。どうすれば一家団らの時間を持てるか考察した。

⑩ひろばーを広めよう ～キャップアートで印象付ける～

アートと環境問題に興味があったことから回収したペットボトルのキャップを使ってアート作品を作ることを考えた。広野町の象徴のひろばーをアート作品にすれば多くの人の目に留まりペットボトルのキャップの回収が進むと考えた。



⑪古着の活用

古着のリサイクル事業に関心を持っていた。そこで自ら古着の仕分けに参加し、どのような古着がどのような年齢層にどのような目的で採用されているかを調査した。古着再利用の可能性を探求した。

⑫不自由なく過ごすには？

すべての人が不自由なく過ごせる社会を目指したいと考え、身近なところで生活に不自由な物や場所がないかを調査した。物が充実していれば人の心も満たされると考えていたが、物よりも人の心が大切だということに気づいた。

⑬民話を通して地域を知る

非常食の必要性を認識することと災害に備える意識を高めることを目的として、非常食を作ってみたり、公的に保管されている備蓄品について調べたりした。高齢者や子供を抱える世帯、外国人などに対しては配慮が必要なのことがわかった。

⑭福島と世界

震災で差別を経験し、福島県が風評被害に遭っていることに対して、福島についての印象を、SNSなどを利用し、いろいろな意見をもとに、どのようにしたら福島の印象が良くなり、各種産業が普段通り行えるようになるのかを考察した。

⑮繋がる世界と福島

中学校まで中国に住んでいた経験を活かし多くの国際交流活動に参加した。福島県が風評被害を受けており、自分のルーツを活かし貢献できることを模索した。将来は現地での交流ができる、異文化交流の場を設けたい。

⑯音楽で町を元気に！

広野町を由来とする童謡「とんぼのめがね」のよ

うに、町民が親しみやすい音楽を広める活動を行った。文化祭で自身の広野町の新たなテーマソングになるような童謡作曲し披露した。音楽の可能性について深めることができた。



⑰風評被害と心理

風評被害を減らすため、風評被害と情報の関係性について調べた。誤った情報の発信が風評被害の原因であると考え、どのようにすれば正確な情報を発信できるかの調査をポスター掲示やアンケートで行った。活動の中で、情報を正確に伝えることの難しさに気づいた。

⑱小説で福島に人を

小説を書いてみたいと言う気持ちと、地域振興の役に立ちたいと言う2つの気持ちを掛け合わせてみた。携帯で読める小説をネットで発信。その際に広野町の特産物や名所を小説に散りばめれば、広野町の交流人口が増えるきっかけになるのではないかと考えた。

⑲交流を通して双葉郡の魅力を伝える

双葉郡の魅力を、交流を通して広めたいと考え活動した。本校生徒へのアンケートや広野町、楡葉町の町民へのインタビューから広野町の魅力をマップにまとめた。活動の中で、人と人との繋がりの大切さを実感し、目的の達成には地域との協同が必要であると考えた。

(3) 成果

行動制限があった昨年度と比べ、今年度はアクションを行う機会が徐々に増え、地域人材とのつながりを大切にしながら探究を進めることができた。活動の中で、自分が社会を変えることができる力を持っていることに気づき、「変革者」として果たすべき役割について考えることができた。

(4) 課題と展望

コロナ禍の中、徐々にアクションの機会は増えたが、それでも十分なアクションができたとは言えない状況であり、やむを得ずオンライン上で交流することが多くなってしまった。文化祭において発表や展示をするアクションを行った生徒や、ある程度まで探究が進んでしまった生徒などは、煮え切らずに探究を終える生徒もいた。教員によるアクションの提案を積極的に行うことが重要であると考えた。

2. 3. 2 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たな再生可能エネルギー推進ビジョンとして震災以降の社会情勢も反映させた「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

本校の再生可能エネルギー探究ゼミでは、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン 2021」をもとに福島県や双葉郡の現状を把握し、課題を見だし、解決の糸口を探究することが一般的な進め方ではある。フィールドワークや基礎実験などの演習を全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。それと同時に、各グループごとの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒12名が、お互いが協力しながら、探究活動を進めてきた。全体の活動としては、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン 2021」を参考にFH2Rの見学、ソーラーカー大会参加、CQEVミニカートレース参加(筑波)等、様々な取り組みを行ってきた。また、各グループの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。除去土壌の再利用班、CO₂削減班、マイクロプラスチックについて班、小水力発電班等野心的な探究テーマを設定し、探究活動を進めてきた。

「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン 2021」の概念図



(2) 実施内容

①CO₂削減班

CO₂削減の為に個人でできることは何があるのか、地球環境の現状を知り、一人ひとりが、「節電」、「省エネ」に日常的に「能動的」に取り組む社会を目指すというものです。その実現の為に考えた検証は、植物や木を増やせばCO₂の吸収を促進できる、電気自動車の導入、微生物発電、節水、節電、プラスチック削減、都市ガスを電気で代用などです。実践した結果は、植林は長期的にみれば、効果はあるがコストと土地、時間がかかる。電気自動車の推奨は自分たちでやるには難しい。微生物発電は毎秒2[μW]でほぼ効果ありませんでした。最終的に節電、省エネが一番身近で取り組みやすく、また各家庭の生活費も削減できるので、取り組みやすい結果になりました。具体的には無駄な電気をこまめに消す、寝るときやエアコン使用の節約です。班員の各家庭試みたが、夏や冬の気温で我慢しなくてはならなく

なり、不自由な暮らしになるので続かない。節電は自分たちが意識することで実現できたが、毎日継続して実施することが難しいという結果になりました。改善点は、大規模な電力需要家(学校や大企業)で節電を積極的に取り組む。

未来創造探求を通して自己の考え方、姿勢の変化、成長は、この探求をする前は、引っ込み思案で自分がやっても無駄だよなーと自分から積極的に取り組むことが少なかったが、探求を通して自分が行動することに意味があることを知り、まずは自分から始めようという考え方になりました。また姿勢の変化として、目標を達成するためではなく、日ごろから無駄を省いて生活の一部として心がけることが大事だと思いました。

出典「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン 2021」〇〇〇〇

②水素班～「水素を知る・伝えること」～

水素エネルギーをわかりやすく広めるためにはどうすればいいのか?それには水素社会・水素エネルギーをすべて理解するのではなく、基礎的なことやある程度までのことを理解している状態を目指しています。

水素はこれからの脱炭素の大切な役割になると思い、浪江町の福島水素エネルギー研究フィールドFH2Rを見学した。職員の方に施設について話を聞き、再生可能エネルギーを利用したグリーン水素の製造する実証運用施設。太陽光発電から得られる電力によって水の電気分解をおこない水素を取り出している。水素製造装置は10MWと世界最大級で1時間あたり1,200Nm³の水素を製造することができる。この量を1日稼働すれば約150世帯の1か月分の消費電力量、もしくは燃料電池車両約560台分の燃料に相当するエネルギーをつくりだすことができるのでした。製造された水素は、燃料電池や水素ステーション、産業用として使用され、東京2020オリンピック・パラリンピックの聖火台や一部の聖火リレーの燃料としても使われ福島県ではサッカーナショナルトレーニングセンターのJヴィレッジや浪江町の道の駅なみえ、福島市のあずま総合運動公園などにも提供されている。



福島水素エネルギー研究フィールド/FH2R（出典：NEDO）

石炭や石油などの化石燃料を燃やして水素を製造する方法を「グレー水素」、化石燃料を使って水素を製造するが、排出したCO₂を回収や貯留することでCO₂の排出を低減「ブルー水素」、最後に太陽光発電など再生可能エネルギーから水素を製造する方法を「グリーン水素」の3種類に分類されることを知った。

また、2022年11月19日と20日にJヴィレッジで親子向けのカーボンニュートラル啓発イベントに参加する機会がありそこで今まで学んできた水素エネルギーについて丁寧にわかりやすく説明することができたと思う。

探求で得た成長は、水素エネルギーや再生可能エネルギーの現状やメリット、デメリットがわかり、テレビや新聞で再生可能エネルギーについてのニュースはある程度理解でき、そのことについて周りの人や親に説明できることだと思う。



③ 小水力発電の作成、実験班

広野町は豊富な水資源があり、小水力発電を活用し町の歩道を、イルミネーションで照らそうと考えました。

地域の現状は、人口が減少し、活気が少ないと感じました。街灯の数が少なく、歩道が暗く危ないこと、加えて、地域自体もどこか活気のないように思いました。

再生可能エネルギーを使って、イルミネーションを点灯することで町の歩道や人の心も明るくなることです。

そのためのアクションは、太陽光発電を使用した、イルミネーションを設置、点灯をすることです。また、小水力発電の作成、実験です。

結果は、町民の方に町が安全になった、明るくな

ったと感じてもらえた。町の街灯も増え、LED化で夜も明るい歩道が増えました。もう一つの課題は、小水力発電でしたが、生活に使用するには様々な困難があることがわかりました。

未来創造探究を通して地域の方々から頂いた様々な知恵を元に、お世話になったこの地域のために、私たちができることをこれからも探し続けていきたいと思います。

④ 除去土壌の再生利用とその可能性班

除染作業によって発生した大量の汚染土壌が中間貯蔵施設に蓄積されていく問題があります。

飯館村長泥地区で環境省が進めている再生利用実証事業の最新状況について学習をしました。そこでは、除去土壌の放射能の安全を確認した上で、造成可能な農用地等の利用促進を図ることとされています。風評被害もあり、安全性を示そうと考えたとき、除去土壌を利用して場所を取らないようにするには、農作物の育成に活用することと仮説を立てました。それを踏まえて、実証実験からはどのような安全性を示す数値が出たかなどを詳しく調べてきました。しかし、除去土壌を減らすことについて直接的に解決することはできませんでした。探究に取り組む背景となったきっかけ・起点として、東日本大震災を経験して多くの災害による被害を目の当たりにしたことが最も大きな出来事になったと感じます。

探究発表で除去土壌の再生利用や、福島県外の人々が、福島県産の作物に対してどのような意見を持っているか、またその対策案などを友達や先生方との意見交換をすることができました。そして、地域・社会が抱えている課題について考え、福島県外の人々から県内産物への良いイメージを作り出すために地域の理想の未来を構想したりすることができました。

基本的な学習の一環として、再生可能エネルギーのあり方について、より具体的に話し合うことなどを行ってきました。

(3) 成果

再生可能エネルギーの探究を通じて、身近にあるエネルギーを様々な方法を用いて取り出し電気エネルギーに変えて使えるようにすることが、アイデア次第で簡単にできると理解できた。

(4) 課題と展望

各種エネルギーを電力に変換する方法や、電力を冷房、暖房、モーター等様々な用途を考えるベストミックスを個人レベルや職場単位、地域単位で進めることで、そのモデルを発展させ全国に広めることができる可能性を感じた。

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/fukushima-saiene/#houkousei>

2. 3. 2 アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミは、双葉郡の農業生産の現状を鑑み、今後の農業とビジネスを探究するゼミである。令和4年度はアカデミック系列、スペシャリスト系列農業、商業の生徒から成り、計8名（女子8名）で実施している。自らの関心のある事柄と「農業」や「商業」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて探究活動を行っている。

(1) はじめに

アグリビジネスゼミに所属する生徒は、商品開発に関心を持つ者が多い。所属生8名のうち7名がスペシャリスト系列の農業または商業選択者であり、教科の授業をとおして地域資源を活用した商品開発に取り組んでいる。それゆえ、教科と連携させながら、双葉郡の資源を使った商品開発を目指す活動を進めてきた。

全体の活動としては、2022年7月21日に、福島大学 農学群職農学類 則藤孝志先生による「フードシステム」についての講話を聴いた。『農業と食品産業は、原子力災害からの復興を目指す「車の両輪」である』という研究上の理念から始まり、農と食による地域の盛り上げ活動の考え方や実践例について学んだ。講話の後半では、本ゼミ生に向けて「(探究のテーマについて)なぜそれをするの?」という問いかけがあり、探究のきっかけや思いを語り合う場面もあった。

(2) 実施内容

テーマおよびキーワードは、次のとおりである。

テーマ	キーワード	編成
エディブルフラワーの栽培とゼリー作り	農業、食用花、無農薬栽培、地域活性化	グループ
美容で双葉郡の魅力を伝えたい!	美容、商品開発、双葉郡の果物、地域活性化	グループ
双葉郡のフルーツで町を元気にしよう! 廃棄品を使用した新商品の開発について	商品開発、双葉郡の果物、果糖、ジャム	グループ
双葉郡の新土産「コーヒーかす」の石鹼～コーヒーかすの再利用可能性について～	再利用、商品開発、コーヒーかす、石鹼	個人

(3) 成果

①エディブルフラワーの栽培とゼリー作り

地域の花を使ったスイーツを作り、双葉郡の景色を多くの人に知ってもらうことを目的とした探究活動である。スペシャリスト系列農業選択者3名から成る班で活動し、花の無農薬栽培と、花を使ったスイーツ作りを行った。

県内でエディブルフラワーの栽培を行っている「にこにこバラ園」を訪問し、エディブルフラワーに適した花の品種の選び方や、無農薬での栽培方法について学んだ。8月より本校施設内でマリーゴールドの無農薬栽培を実践し、エディブルフラワーの自家栽培に成功した。温室内での栽培管理が継続でき

なかったことが原因でアブラムシがついたが、希釈した食酢水溶液を噴霧することで対処する工夫がみられた。



自家栽培のマリーゴールドを使ったスイーツ作りでは、花の見た目や香りをそのまま残すことが可能な濡奈加工法として、ゼリーを選択した。ゼリーは二段仕立てとし、下層には

ヨーグルト風味の白いゼリー、上段にはエディブルフラワーが入った透明なゼリーを重ね、味も見た目も高評なスイーツが完成した。



探究で得られた学び・力は、「コミュニケーション能力」と、地域のために自ら動く「行動力」である。同班の活動成果は、2023年1月開催の「県総合学科高校生徒研究発表会」にてポスター発表を行った。

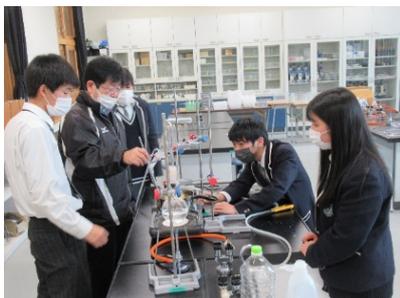
②美容で双葉郡の魅力を伝えたい!

若い世代の話題となりやすい美容に着目し、双葉郡産の果物を活用した化粧品作りと、それによる若者の呼び寄せを目的とした探究活動である。

広野町で化粧品を製造している「(株) レイス」を訪問し、直接肌に触れる商品は、アレルギー検査の実施や安全性を示すための申請が必要であることを学んだ。

肌につけない美容製品として、香りでリラックス効果や美容効果が得られるアロマに着目した。水蒸気蒸留法の装置を自作し、みかん皮やバナナ皮、ドクダミなどから香りを抽出した。結果は、採れた香り成分量は微量であり、アロマ効果を期待できる香りではなかった。抽出法や抽出資材の改善をすることで、日本人好みのフレッシュで清潔感のあるフルーティーな香りが得られ、双葉郡の果物から話題性のあるアロマができると期待できる。

探究で得られた学びは、他者との関わりをとおして「ものごとの捉え方が広がった」ことだ。見学先の工場での相談や、カタリバスタッフからのアドバイスから多くの気づきを得られた。探究活動をきっかけに、他者の考えを受入れようとする姿勢が強まったという成長が見られた。



③双葉郡のフルーツで町を元気にしよう！廃棄品を使用した新商品の開発について

双葉郡産の果物を活用した新商品開発を目的とした、砂糖不使用のジャム製造についての探究である。

果物に含まれる果糖に着目し、果糖を抽出・粉末化することで、砂糖の代替品としてジャム作りに活用しようと考えた。バナナ、キウイ、オレンジなどの果物をペースト状にし、濾過して得られた濾液を70℃で1～2週間乾燥させて、粉末化を目指した。結果は、得られた乾燥物にはべたつきがあり、粉末化はできなかった。べたつきの正体は、乾燥不十分によるもの、または濃縮された果糖のいずれかであると考察している。

探究で得られた学びは、「物事は思い通りに進まない」ということと、その解決のためには「視野を広げること」が必要だということである。果物から砂糖が取れると勘違いしたまま実験を行って



いたため失敗続きと感じていたが、実はこれらの実験ではドライフルーツが完成していたことなどに、発表会をとおして気づきを得ていた。

④双葉郡の新土産「コーヒーかす」の石鹸～コーヒーかすの再利用可能性について～

本校カフェで廃棄されているコーヒーかすに着目し、コーヒーかすを活用した石けん作りを目的とした探究である。

石鹸の自作を目指し、食用オイルと苛性ソーダ水を混合する製造法と、グリセリンソープを融解する製造法の2つを実践したが、結果は難しかった。

いわき市で石けん製造を行っている「GSauto JAPAN・ANDANTE」を訪問し、コーヒーかすを使った石鹸の商品化についての会談を複数回行った。コーヒーかすをリサイクルことの意義や、石鹸におけるコーヒーかすの消臭効果などを協議し、商品化に向けて具体的な企画立てをした。年度内の実現には至らなかったが、継続する価値のある探究である。



探究で得られた学びは、「情報に直接触れる」ことの大切さである。本探究では、情報の収集や発信において SNS は極力使用せず、実際に見たものや触れたものを信用して活動を進めてきた。直接触れることで気づきを得られたり、信頼関係を構築できたりした。

(4) 課題と展望

地域資源を活用した商品開発を自分で企画し、必要な技術を自ら外に学びに行ったが、多くの大人との関りから地域課題について再確認し、実践を通して何を学ぶのかを整理していくことが必要である。

2. 3. 1. スポーツと健康探究ゼミ

概要

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から12年が過ぎた。この12年間は、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開など、復興が進み明るい話題が増えてきた。震災や原発問題で受けた子どもたちも、運動能力低下問題も、様々なプログラムが考えられるようになり、少しずつ回復傾向に向かっている。しかし、震災や原発問題の余波もまだ残り、福島県民の生活に不安を残している。不自然な環境で生活を送っている人もおられる。時間経過したことで忘れられ、今年度は新型コロナウイルス感染症が世界で拡大。私たちの生活する日本、福島県にも大きな影響をもたらした。震災からの復興を目指すスピード感にも鈍りを与えた。これは12年目に私たちが身をもって感じたことである。そして「当たり前」は「当たり前」ではない。「緊急事態宣言」「ソーシャルディスタンス」など、私たちが「まて」を感じた「新しい生活様式」。「緊急事態宣言」は「スポーツ」というものが、ただの「ただの」人々の「元気」や「勇気」を「与え、様々な課題を解決できる可能性」も秘め、たまたま「改め」て「感じる」と「な」った。「観る」「支える」「知る」。このような状況にあるのかを「知る」、スポーツを生かして世界や社会、地域、自身の課題解決を目指す。

(2) はじめに
スポーツを通して地域を豊かにする方策を、健康増進の総合型地域クラブの活用、ポータルサイトの構築による持続可能な地域の実現や、科学的見地からの探究と実践を行う。バーリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容
① 興味あるテーマに対する文献調査
高校1年次に決めた、各生徒のテーマに沿って、インターネットや図書館を使用した文献調査を行った。生徒が抱える小さな疑問や、人、施設、団体、専門家を切り口として、既に行われている取り組みや、分かっていることの情報収集した。その際、インターネットや図書館を使った調べる方法や気を付けたことに対して、実践的に学習する機会を設けた。

2 地域のスポーツ振興を担う施設、団体の訪問
文献調査の後、地域のスポーツ振興を担う施設、団体を代表して、広野みかんクラブ、ジョナルトレーニングセンターJヴィレッジを訪問取材を行った。文献調査で分かったことと、実際に活動している方から得た情報と、同じ部分を通して、生徒が持つテーマをより多様な視点で向き合う時間を設けた。

3 グループ学習(調査・アクション)
文献調査や地域の調査を通して得た情報を、自身でより深く調査する内容を検討し、実施する内容による活動する生徒が主体性を、グループ学習を行った。

生に運動する機会を届けた。



“外遊び減少解決”

東日本大震災による福島第一原子力発電所事故の影響により、屋外での遊びが減少し、子どもたちの外遊びの機会が減少している。この課題に対して、みかんクラブが、子どもたちの外遊びの機会を提供することを目的として、活動している。

“肥満児を減らそう”

広野町において、肥満児の割合が多いという認識を基に、アンケート調査を実施した。その結果、運動が嫌いな生徒が多いことが分かった。このことから、子どもたちが運動を好きになるための準備を行った。実践する予定だったが、コロナウイルス大流行により、中止に追い込まれてしまった。

“Easy Sports で not 苦手”

「運動が苦手な人を減らすにはどうしたらいいか」という疑問を基に、アンケート調査を行った。結果、若い頃からスポーツをやっている子どもが楽しめるスポーツを開発した。



広野 Revolution”

「自分たちの得意なスポーツを使って貢献できる」と、この町が福島の活動の中心と知った。広野小学校でスポーツイベントを開催し、小



“コロナ禍でもスポーツ観客数を増やそう”

新型コロナウイルスの流行により、スポーツ観戦で観客が減少した。しかし、この状況を逆手に取り、観客を増やすための取り組みを行っている。FCの試合や、VRでのスポーツ体験など、新しい観戦の形を模索している。また、学校内での部活動の活性化も目指している。



“高齢者に健康的な食事を”

高齢者の食生活の改善は、健康と生活の質を高めるために重要である。食生活の改善には、栄養バランスの取れた食事と適度な運動が不可欠である。また、高齢者の食生活の改善には、地域の住民が協力して取り組む必要がある。健康的な食生活を営むことで、高齢者の生活の質を高め、健康寿命を延ばすことが期待される。

“筋トレをして運動不足を解消しよう”

運動不足は健康に悪影響を及ぼす。筋トレを行うことで、基礎代謝を高め、脂肪を燃焼させることができる。また、筋トレは骨密度を増加させ、怪我のリスクを低減させる効果がある。運動不足を解消するためには、毎日15分程度の筋トレを行うことが効果的である。

“ケガゼロプロジェクト”

ケガを減らすことは、スポーツを楽しむための重要な課題である。ケガゼロプロジェクトは、ケガの予防と治療の両面から取り組んでいる。ケガの予防には、適切なウォームアップとクールダウンが不可欠である。また、ケガの治療には、適切な応急処置と医療機関への相談が重要である。



“怪我をなくして笑顔広がる世界を創る”

怪我をなくして笑顔を広げることは、スポーツの楽しさを最大限に引き出すための重要な課題である。怪我をなくするためには、適切な指導と安全対策が不可欠である。また、怪我をなくして笑顔を広げるためには、地域住民の協力とサポートが重要である。

“野球に興味をもってもらい野球人口を増やそう”

野球は多くの子どもたちに愛されているスポーツである。しかし、近年は野球人口が減少している。野球に興味をもってもらい、野球人口を増やすためには、子どもたちに野球の楽しさを伝えることが重要である。

“パークゴルフで肥満率低下と地域活性化”

パークゴルフは、運動不足を解消し、肥満率を低下させるのに効果的である。また、パークゴルフは地域活性化にも貢献している。パークゴルフを通じて、地域住民の交流を促進し、地域の活性化を図っている。

“バドミントンで地域活性化”

バドミントンは、運動不足を解消し、健康を促進するのに効果的である。また、バドミントンは地域活性化にも貢献している。バドミントンを通じて、地域住民の交流を促進し、地域の活性化を図っている。



“サイクリング”

サイクリングは、運動不足を解消し、健康を促進するのに効果的である。また、サイクリングは地域活性化にも貢献している。サイクリングを通じて、地域住民の交流を促進し、地域の活性化を図っている。



“スポーツを通して町をきれいにしよう”

スポーツを通して町をきれいにすることは、地域活性化にも貢献している。スポーツを通じて、地域住民の交流を促進し、地域の活性化を図っている。

2. 2. 3 健康と福祉探究ゼミ

本ゼミは、少子高齢化や人口減少が加速する地域において住民が安心して暮らすことができる町づくりを目標として活動している。アカデミック系列生徒4名、スペシャリスト系列生徒7名（農業1名、福祉6名）の計11名が所属し、地域の課題解決に向けて、昨年度から個人あるいはグループで探究活動を行ってきた。

自分が興味関心を持っている事柄と「健康」「福祉」の分野を関連させ、世代間交流の活発化や防災意識の向上、食習慣の見直し等、よりよい生活の創造を目指し探究と実践を行っている。

(1) はじめに

昨年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、時間をかけて準備してきたイベントが直前で中止となる等、対面での探究活動が思うように進められないことが多く、落胆する生徒の姿も見られた。今年度は、オンラインを活用したり、規模を縮小したりする等、当初の予定にこだわりすぎずに課題解決のためのアクションを行っていくように、生徒たちへの声かけとアドバイスを行ってきた。

(2) 実施内容

① 2年次の活動

5月から7月にかけて福祉科教員、大学教授、栄養教諭による講義や演習を受け、「福祉」「健康」「栄養」分野についての知識を得ることで、探究活動を進めるヒントをつかむことができた。夏季休業中に各自のテーマについて調査を行い、8月にはその内容をゼミ内発表会で発表し、同じゼミの生徒や教員からアドバイスももらった。9月以降は、課題解決のための活動を個人、またはグループで進めてきた。

② 今年度の流れ

・中間発表（4月26日）

2年次で行った探究活動の内容と、今後の活動予定について、PowerPointを用いて発表を行った。見学者からのコメントと発表の振り返りが、その後の活動を進めるうえでのヒントとなった。

・課題解決のためのアクション（4月～12月）

新型コロナの状況を踏まえて活動の見直しと実践を繰り返した。

・未来創造探究 生徒研究発表会（9月24日）

これまでの探究活動についてPowerPointを用いて発表を行い、審査員と見学者からコメントを頂いた。

・論文作成（10月～1月）

2年間の探究活動を論文にまとめた。

③ 探究活動内容

・地域リング

南相馬市出身の2名が、地域における子ども、高齢者、障がい者の交流を増やすことを目標に活動を行ってきた。今年度は交流イベントを準備していたが、新型コロナの感染拡大により直前で中止を余儀なくされた。しかし、準備の過程で、地元で市民の交流イベントを行っているNPO法人と出会い、ボランティアとしてそのイベントの運営に携わった。



南相馬市での交流イベント

・介護を知って興味を持ってみよう

高齢化が進行しているにも関わらず介護従事者が減っていることを問題視し、多くの人に介護に興味を持ってもらうことを目標に探究活動を行ってきた。今年度は、文化祭で本校生と来場者を対象としたボッチャ体験イベントを実施した。



文化祭でのボッチャ体験イベント

・LGBTを知ろう

LGBTへの理解を広めることを目標に、LGBTへの認知度や理解度に関するアンケートを実施した。ハワイに短期留学をした際には、現地でLGBTに対する意識調査を行った。

・交流で地元の魅力を発信

他ゼミの生徒と協力して、本校が位置する広野町の魅力を住民の方々、広野小学校の児童、中学校の生徒、本校生から聞き取り、その魅力を地元イベントで発信するという活動を行った。



広野小学校の児童たちへ放送で協力を呼びかける様子



校内で広野町の地図を掲示



広野町の魅力を書き込んでもらったマップ

・ひとりひとりが取り組む防災

防災意識を高めることを目標に、校内外で様々な活動を行った。校内においては、他ゼミの生徒と協力して、避難訓練の改善と防災意識を高めるためのワークショップを提案し実行した。校外の施設においては、防災に関する展示と、広野町環境防災課から頂いた非常食の配付を行った。



防災ワークショップの様子



防災に関する展示

・中高生「食育」プロジェクト

若い世代に正しい食習慣を身に付けてもらうことを目標に活動を行ってきた。本校生に実施したアンケート調査の結果、味が濃いものを好む傾向が見られたことから、少ない塩分でも満足できる調理法を教える調理実習を実施する予定であったが、新型コロナの感

染拡大により直前で中止となった。

・DANCEでたくさんのSMILEを

コロナ禍で増加したストレスをダンスによって軽減させることを目標に、本ゼミの生徒2名で協力して活動してきた。校内でのダンスイベントを企画していたが、新型コロナの感染状況の悪化により中止した。感染者数が落ち着いてきた頃に、小学生を対象としたイベントを実施した。



ダンスイベント

・運動と音楽で子どもたちに笑顔を！

音楽と運動を通して子どもたちの笑顔を増やすことを目標に、本ゼミの生徒2名で協力して活動してきた。当初、広野町のこども園で音楽と運動を組み合わせたイベントを行う予定で準備を進めていたが、新型コロナの感染拡大のため中止となった。対象を小学生に広げて、イントロクイズや、ダンス、リレー等の活動を行った。



小学生にイベントについて説明する様子

(3) 成果

今年度も、新型コロナが探求活動に与えた影響は大きく、対面でのイベント開催中止が相次いだ。しかし、多くの生徒たちが、イベントの対象者を変える等、あきらめず柔軟に対応し、実行に移した。実践を複数回行う生徒もいたが、行ったことに満足せず、振り返りを行い、次の活動を改善するという姿が見られた。

また、生徒の論文からは「自分が持っていた思い込みや偏見に気付いた」「自分で問題点を探し、解決法を考えられるようになった」「あきらめずに挑戦することの大切さを知った」「自分も地域の一員だという意識が強まった」等の記述があり、生徒自身が自らの成長を実感していることが伺われる。

(4) 課題と展望

現在生徒たちは、課題解決のためのアクションを行う際に、イベントの企画や告知、参加者集め等を一から自分たちで行っている。しかし、既に地元で活動している団体と連携・協力することも手段の一つとして有効なのではないかと考える。

2. 3. 3 探究活動発展のための発表会（未来創造探究 生徒研究発表会）

高校2年次から2年間取り組んできた「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。本校における課題解決型学習の成果を披露する機会として、調査アクションのみならず、課題を解決するアクション、生徒自身の総括、社会への提言等を発表した。様々な分野の第一線で活躍されている方（専門知審査員）や地域の課題に取り組んでいる方（地域知審査員）に審査をお願いした。今年度は高校が70、中学が15とのプロジェクト数が増えた一方で、昨年度の反省から1発表あたりの時間を長くしたため、分科会でコンテスト部門と交流部門に分け、コンテスト部門での上位発表のみを全体会に進出する形式を取った。また、中学校が開学して4年目であり、3年生が未来創造学の成果を発表する2年目となった。

(1) 概要

- ① 目標
- 1) 地域課題解決のための探究と実践に取り組む学習「未来創造探究」の成果をまとめて発表することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（D：表現・発信力、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 2) 発表を聴講することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（A：社会的課題に関する知識・理解、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 3) 保護者、地域の方々、県内外の教育関係者に本校の探究活動の内容を発信し、ステークホルダーとの協働関係をより強固なものにする。
- ② 日時 令和4年9月24日（土）9：00～16：50
- ③ 内容
- 9：00～11：05 分科会（12教室で7発表）※10分休憩あり
 - 11：10～11：25 休憩
 - 11：25～12：00 審査員によるミニ講義
 - 12：00～12：50 昼食・休憩
 - 12：50～13：00 ★開会行事
 - 13：00～14：00 ★全体会Ⅰ（高校生代表発表）
 - 14：00～14：10 休憩
 - 14：10～15：10 ★全体会Ⅱ（中学生代表発表）
 - 15：10～15：35 ★閉会行事（結果発表、表彰、総評）
 - 16：15～16：50 教員と審査員の探究交流会

④ 審査員 専門知・地域地を持つ審査員17名

	氏名	所属	専門/地域		氏名	分野 or 地域	専門/地域
1	田村 学 様	國學院大學人間開発学部 教授	探究	10	菅波 香織 様	未来会議 議長/弁護士	地域全般
2	松岡 俊二 様	早稲田大学大学院 アジ ア太平洋研究科 教授	地域全般	11	牧内 昇平 様	ライター・物書きユニット ウネリウネラ	メディア
3	平山 勉 様	双葉郡未来会議 代表	富岡	12	下枝 浩徳 様	葛力創造舎 代表理事	葛尾
4	青木 淑子 様	富岡町3.11を語る会、元 富岡高校校長	富岡	13	小山 良太 様	福島大学 食農学類 教 授	アグリ
5	永井 祐二 様	早稲田大学 環境総合研 究センター 研究院教授	再エネ	14	江川 賢一 様	東京家政大学人間栄養学 部人間栄養学科 教授	スポーツ

6	中田 スウラ 様	福島大学 人間発達文化 学類 特任教授	地域全般	15	明石 重周 様	Jヴィレッジ 職員	スポーツ
7	半谷 栄寿 様	一般社団法人 あすびと 福島代表理事	再エネ	16	猪狩 僚 様	いわき市役所/IGOKU 編 集長	福祉
8	丹波 史紀 様	立命館大学産業社会学部 現代社会学科	原子力防災	17	佐藤 亜紀 様	HAMADORI13 事務局	福祉
9	高原 耕平 様	人と防災未来センター 研 究部 主任研究員	原子力防災				

(2) 詳細

① 事前準備

今年度の発表会は県内に「まん延防止措置」がとられている状況下での実施となった。昨年度同様に、コロナ感染症の防止対策を徹底して行うことに留意して実施することとなった。対策としては、全体会における三密回避を徹底するためにアリーナには高校2・3年次と中学校3年生だけとした（中学校1・2年生と高校1年次は別教室でZoom映像を参観する）。また分科会会場の人数についても多くなりすぎないように、8会場で分科会を行った。外部からの来場者は審査員のみとし、それ以外の参加者についてはZoomによるライブ配信を行った。

実践内容を様々な観点から探り、参加者全体で学びを深めるために、分科会会場ごとに専門知を有する審査員1名、および地域知を有する審査員1名に参加していただき、校内審査員（教員）1名を加えて3名で審査をすることとした。地域知を有する審査員は本校の開校の経緯や生徒の探究活動が面的に広がってきたことをふまえ、昨年度は双葉郡の全八町村からお呼びするようにした。今年度はさらにいわき市からも審査員をお呼びした。審査員の方々はこれまで本校の探究活動に参画して下さった方が多く、依頼した審査員の方には快諾をいただいた。

今年度は個人探究に組んでいる生徒が増加し、更に中学校3年生の発表も加わったため、総数の増加が昨年度以上に増加した（今年度74PJ【高校48PJ、中学校16PJ】、昨年度は48PJ）。そのため、今年度は動画による事前審査を行い、高校の発表プロジェクトを58PJから32PJまで絞ることとなった。また、昨年まで発表時間10分であったのを5分に短縮し、内容をより精選して発表するように指導をした。

・動画による審査（FlipGridを使用）

発表を5分にまとめ、動画をFlipGrid上にアップさせ

た。この動画は事前審査のために審査員とも共有をした。



② 分科会

- ・昨年同様に、分科会ではゼミの枠を外し、複数のゼミの生徒が参加するようにした。とは言え、分野については共通して括れるように配慮した。
- ・発表数と時間を勘案し、会場数は8会場、各会場で6発表（高校4発表、中学校2発表）を割り当てた。
- ・各分科会に外部審査員2名、内部審査員（本校教員）、司会（本校教員）を設定した。生徒は発表に集中できるように、係の設定は極力少なくなるようにした。



- ・発表するだけでなく、専門知を有する審査員によるミニ講義の時間を設定した。
- ・審査のための審査基準を作成し、その基準に基づいて各分科会会場で審査を行った（未来創造探究賞）。また生徒投票による審査も同時に行った（共感賞）。
- ・分科会の結果、以下のグループが全体会出場となった。（全発表内容については巻末資料を参照）。

	氏名	ミニ講義 タイトル
I	田村 学 様	これからの社会に求められる資質・能力と探究
II	松岡 俊二 様	本当に大事なことと向き合うことは容易ではない：11年半を経た福島の原子力災害
A	丹波 史紀 様	原子力災害は何を地域にもたらしたか
B	高原 耕平 様	〈防災〉を哲学してみる
C	菅波 香織 様	対話が未来を作る～9年間の未来会議を通じて感じる無力感と希望～
D	牧内 昇平 様	メディアの原発問題報道
E	下枝 浩徳 様	祭復活からの葛尾村地域づくりについて～大丈夫、俺たちに未来はある～
F	小山 良太 様	震災11年以降の福島県農業と新しい産地・ブランド形成の可能性
G	江川 賢一 様	これからのスポーツ健康科学
H	明石 重周 様	地域スポーツ振興におけるJヴィレッジの役割について
I	猪狩 僚 様	福祉・行政・コミュニティと課題へのアプローチについて
J	佐藤 亜紀 様	地域コミュニティと向き合う

○環境事業でシビックプライドを作ろう

○Enjoy with the elderly

○もったいないバナナ

○大熊×いちご×私

○Future Quest

○子どもロコモ改善プロジェクト

○鉄たまごという地域の可能性

○わかものがたり



③ ミニ講義（専門知審査員による）

・本年度も昨年度同様に専門知審査員によるミニ講義をお願いした。特にこれから探究を進めていく低学年の生徒にとっては、専門家のお話を聞ける貴重な時間となった。昨年度は講義20分の内容であったが、今年度は講義の時間を30分とし、内容を充実させた。なお、ミニ講義のタイトルは以下のとおりである。

④ 全体会

・全体会では先述の高校生代表4プロジェクトと中学生代表3プロジェクト、中学校バドミントン部の特別発表の全8プロジェクトが発表した。表彰は以下の通りとなった。

「未来創造探究 最優秀発表賞」

・Let's cheer up ふたば!!

「未来創造探究 優秀発表賞」

・話せばわかる、話せば変わる～いわきを越えた学びを通して～

・子どもと若者の社会参画～未来のカタチ～

・海洋ゴミのことを次世代へ伝えたい

「未来創造探究 発表賞」

・誰一人取り残さない防災

・サステナブルな医療を！ by AED

・絵本を作って東日本大震災を伝承する

「共感賞」Let's cheer up ふたば!!

中学校「未来創造学 優秀発表賞」

・常磐線盛り上げ隊

・はるの花「桜」

・蛍復活



⑤ 総評（専門知審査員：佐藤理夫、菅波香織）

1) 佐藤理夫先生から

・探究活動ができる恵まれた環境を振り返って欲しい。他校にはない充実した設備、熱心に探究に向き合っている先生、なにより地域の方々の協力があることを再確認して欲しい。

・中学生の皆さんの発表のレベルが高い。これをさらに高校で伸ばして欲しい。高校生も中学生の目標にな

るように頑張ってください。

- ・テクニカルな話になりますが、5分間のプレゼンはきつかったと思う。人に伝えたいものをもっともっと厳選して欲しい。グループでの発表は考察がちょっと甘いかなと思うところもあった。
- ・探究と学習が乖離していませんか？理系は特に高校までの理科的知識を踏まえてください。また、理系に限らずデータ解析などを活用してください。「やりたいことをやってみた」となってしまうPJも見受けられました。学んだものをいかし、どう進めれるか…特に大学進学を考えている方は意識してください。
- ・これは「探究」ではなく「地域貢献体験記」ではないかと思われるものがありました。それはそれで大切なことですが、成長するためには「高校生がやった」というレッテルがついて満足してしまっってはいけない。20~30才にやった場合でも、そのプロジェクトが地域に活かされているか、考えたい。「高校生がやることだからまあいいか」となってしまうと甘くなる。探究はあくまで探究…。探究という言葉を再考してほしい。体験記録だけにとどまらない論文を期待しています。

2) 菅波香織さんから

- ・地域の課題と自分の関心を合わせて、自分事としてとらえているのが分かりました。みなさんのネットを使った情報活用も上手でした。
- ・現状の把握として、アンケートなどをやっていたと思いますが、発表で見えてこなかった。データがもう少しあればよかった。また、印象で語られる発表も多い。「ヒントを貰えました」「印象が変わりました」というコメントには何を得たのか、どんな風に変ったのか、具体的に欲しい。
- ・みなさんが探究を主体的に取り組んでいるのが伝わりました。2つ目とも関係しますが、みなさんの探究の対象となる地域の子供、高齢者も主体を持つ存在です。コロナで難しかったと思いますが、お一人お一人の心情や意思や尊重すべきことも考えつつ、皆さんのやりたいことを掛け合わせて共創していければ素敵だと思いました。
- ・私的にドキッとしたり、違和感を覚えたワードがありました。皆さんもそれを友人らと言葉にして、対話をして下さい。もやもやを一人の中で消してしまうのは勿体ないです。今日の探究のあとも、対話で未来を作ることを考えていただければと思います。



⑥ 教員と審査員の探究交流会

昨年初めて教員と審査員の探究講習会を実施して、外部審査員と担当教員との懇談会を、発表会終了後に設定した。生徒の発表を踏まえて、日頃の指導方法や連携の在り方等について忌憚のない意見をいただくことができた。今年度は「中学3年間の探究を高校でさらにどのように伸ばしていくか？」という問いを設定し、KPT (Keep, Problem, Try) 法を用いてグループディスカッションを行った。



【Keep (そのまま続けたいこと)】

- ・発表の丁寧な言語化
- ・専門知と出会える場を作る
- ・率直な個人の興味を反映した探究 (中学生)
- ・とがった才能をどんどん伸ばす

【Problem (問題点)】

- ・審査基準が文系の方が点数に反映されやすい (理系のプロジェクトを評価しにくい)
- ・理系をフォローできるゼミ編成
- ・高入生と一貫生のゼミの接続
- ・テーマと自分自身のつながりをもっと言葉にした方がよい
- ・課題からスタートにしないこと
- ・仮説と検証を行って、課題が変わってもいいはずなのに変わらない (「課題」という言葉を使わない方がいいのではないか)
- ・発表時間5分は短い

【Try (来年やってみたい)】

- ・最終発表会で地域の人とであるのではなく、常にオー

プンな関係を作る

・学年を超えた交流・コラボ

⑦ 結果および今後の展望

・今年度もコロナ感染症対策のため、予定していた活動ができなくなるケースがあった。昨年と異なっている点は、Zoomなどの新たなオンラインのツールを手に入れた点である。このツールを積極的に利用し、他県の高校生とオンライン交流会を行った探究やマイクラフトを利用した探究、分科会発表の様子をライブ配信で行う探究など新機軸を導入した探究なども見られた。

・この発表会は1期生から始めて今回が5回目であるが、会を重ねるごとに発表件数が増え、調査だけでなく課題解決のための実践を進める生徒の割合が増えており、質、量ともに高まっている傾向が見られる。一方で、現実的に地域の外に出て課題解決のアクションの総量は絶対的に少ない。また、海外研修がここ2年国内の代替研修に切り替わり一定の成果は出ているが、海外研修を通じて得られる世界の課題と地域の課題を繋げて考える視点が今回の探究で見られなかったことは次年度の課題ともいえる。

・外部参観者向けにZoomによる配信を行ったが、取組そのものに対しては好意的な意見が多かった。また遠方からの参加者も多く遠隔配信のメリットを活かすことができた。一方、映像や音声の質等、配信の技術的な点は課題が多かった。次年度以降は直接来場いただくようになることを願うばかりであるが、今回培った配信ノウハウは今後も生かしたい。

・3年生はこの後、論文作成や探究活動を仕上げる期間に入るが、それらの質を高めるための機会として、全体として今回の発表会は有効に機能したと思われる。また外部の方に本校の活動の様子を理解していただく場としても効果が大きかったと思われる。次年度以降も、定着した取組として実施していく。

2. 4 海外研修・国内研修

2. 4. 1 ドイツ研修

本校では、開校年度からドイツを訪れている。東日本大震災によって、地域課題の先進地ともいえる状況に陥った福島県・双葉郡が、どのような街づくりを行っていくべきかについて考え、帰国後の学びにつなげてきた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、2019年度のチーム(5期生)を最後に渡航見送りとしてきたが、今年度3年ぶりに現地渡航することができた。

1. 研修の概要

(1) 研修の目標・趣旨

本校における高校一年次ドイツ研修では、地方創生イノベーションスクールの一環として、Think Green をテーマとし、2030年に問題となる地域の課題と共通する世界的な課題についてアクションを提言するため、平成28年度にミュンヘンのErnst Mach Gymnasium校と交流を行った。それ以来、同校とはオンラインも含めた交流を毎年継続している。本校では未来創造探究として、原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりについて、それらを福島のための課題ではなく、全世界が共有すべき「持続可能な社会づくり」として探究している。ドイツの環境都市フライブルクを訪問することにより、将来起こりうる世界の難題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩としたい。

(2) 派遣期間 令和5年1月5日(木)から

1月14日(土) 8泊10日

(3) 訪問先 ドイツ フライブルク・ミュンヘン

(4) 参加メンバーと役職

役職	番号氏名
リーダー	1514 谷 聖彩
副リーダー	1503 猪狩 佑紀
副リーダー	1522 林 佳瑞
書記	1317 佐々木 大斗
書記	1327 山形 遥
スケジュール管理	1326 八木 香練
スケジュール管理	1504 伊藤 珠弓
アポイントメント	1508 木村 彩乃

引率団：

齋藤 夏菜子(英語科・企画研究開発部副主任)

塩田 陸(英語科・高校1学年担任・企画研究開発部)

(5) 研修内容

①フライブルク市訪問

ドイツにおける環境や再生可能エネルギー政策の利点や問題点を探り、日本の今後のエネルギーのあり方を考察する。

②ERNST MACH GYMNASIUM 校の生徒との交流

ホームステイをしながら現地の高校生と持続可能な社会を支えるためのエネルギー政策について学び、未来の社会を作る人材としてお互いに研鑽



する。また、現地の高校生との交流活動において、福島の現状を伝えることを通して、福島の安全・再生の歩みを正しく理解してもらう。

(6) 本プロジェクトにおけるふたば未来学園ルーブリック達成目標

B 英語活用力・E 他者との協働・F マネジメント力・I 能動的市民性の長期的支援での上昇。

(帰国直後のUカルチャーショックや、メタ認知が進むことによる一時的な下降。ドイツ研修と探究活動の接続を実感した後、緩やかに上昇することを想定。)

2. プロジェクト開始当初の課題感

(1) 研修時間の確保

今年度の新カリキュラムから、アカデミック系列が毎日7時間の時間割となった。他の系列は従



来通りのカリキュラムであるため、集合研修の時間の捻出をすることや、学校内外の授業外の活動との折り合いをつけることはこれまで以上に困難を極めることになる。また、引率教員が2名体制となり、校内の他の業務により毎回の事前研修に参加できないことが多くなることが想定された。

(2) 探究活動との接続

今年度のカリキュラムより、地域創造と人間生

活を前期週 2 時間+夏季休業登校日で 2 単位履修し、後期に総合的な探究の時間を週 2 時間で 1 単位履修することとなった。実質半年程度の探究活動の前倒しにより、本研修は「生徒の中に探究的な学びに向かうレディネスを醸成する良質なインプットと交流のための海外研修」から、従来の本校 NY 研修が担ってきた、「探究活動の学びの深化と発信・議論の成果の還元」を部分的に担うことになった。事前・事後研修の中で、探究活動との自然な接続が望まれる。

(3) 諸活動との概念的接続

授業時数増による放課後活動の時間的制約により、校外で多様な活動や事前・事後研修での生徒の学びが単発的になることが予想された。諸活動や教科での学びどうしをつなげ、学びの連鎖をファシリテートしていく必要があった。

(4) 参加生徒の系列を超えた学び

上記に加え、参加研修生の系列がアカデミック系列かつ一貫生のチームとなったことにより、参加研修生の議論から多面的・多角的な考察の欠陥に気づかせる場面が必要となった。

3. 研修実施体制

本研修の事前研修は全員での集合研修を原則とした。渡航生どうしで都合を調整し合い、リーダーを中心に常に最大数が参加できる研修を心掛けた。実際に集合する場合は、対面で最大限の効果が発揮される哲学対話などの方法を使って議論をした。事務的な連絡やデータの作成は参加メンバー合意の上で分担をし、オンラインで効率よく済ませるようになった。

(1) 哲学対話

渡航生徒は併設中学からの一貫生であり、中学校時代に行った哲学対話の文化が根付いている。哲学対話とは対話の参加者が輪になって問いを出し合い、一緒に考えを深めていくという対話のあり方である。渡航メンバーは、事前研修の中でこの対話を自然と行うことができていた。

ドイツ研修のメンバー初顔合わせでは、探究活動同様にそれぞれ自分なりの「問い」を考えて研修に臨んでほしいということを伝えている。ドイツ人作家のエーリッヒ・ケストナーの『動物会議』を読み、その内容をもとに 2 度の哲学対話を行った。1 度目は本校にて、10 月 14 日（金）に実施し、神戸 和佳子氏が来校し、対話に参加した。2 度目は 10 月 28 日（金）東京立川の複合文化施設 Play! 内の「どうぶつかいぎ展」で、高橋 源一郎氏・神戸 和佳子氏と哲学対話を行った。

(2) 教科教員による特別授業

12 月 26 日には、地歴科の教員によるドイツの歴史と文化の特別授業を行なった。これは、参加生徒が読んだ書籍などを元にチーム内で問いを吟味

し、担当者とのアポイントも含めて実現したものである。

(3) Canva と Zoom の活用

英語科の担当者が事前に教育者用のアカウントをとって授業で活用していたが、本研修の参加生徒も Canva に招待した。EMG のホームステイの受け入れ家庭の学生に向けて、自己紹介のビジュアル資料を作成して交換した。互いの情報を見ながら、Zoom を通じてオンラインで事前交流を行い、実際のホームステイに備えた。これは、コロナ禍で渡航を断念しながらも、オンラインホームステイなどを通して交流を繋いできてくれた上級生のおかげだと言える。（海外研修で訪問した学校では、あらゆるアプリケーションを用いたリモート授業のノウハウが授業に生かされており、生徒が便利な技術を駆使してやりとりをしていた。Google のアプリセットも含め、事前研修で精通していたと感じることが多くあった。）



(4) 英会話・ドイツ語会話(校外人材)

①過年度 AFS 留学生との会話

本校では、過去 5 年間、AFS アジアプロジェクトを通じて、アジアの若者たちを受け入れ、学校生活を送るプログラムを実施してきた。本校での生活を送った後は、海外の大学に進学する学生が多く、1 期生として本校で約半年交流したマレーシアの学生がドイツに留学している。ドイツでの生活のコツなどについて Zoom でインタビューを行なった。

②旧職員によるドイツ語会話

本校には、過年度、ドイツ語に詳しい教員が在籍していた。冬季休業期間を使って、ドイツの生活に最低限必要な会話表現のインプットを行った。

③ALT による英語会話

本校の ALT による英会話教室も行った。自分たちで入国審査の場面などを想定し、ALT によるスキット練習などを行った。

(5) 文化交流

EMG との打ち合わせの中で、茶道や日本料理をふるまう計画を立てた。そこで、生徒たちは国語科の教員に依頼をし、お茶のたて方を学んだ。また、他国の若い生徒も飲みやすい飲み方についても考えてもらい、ALT にふるまった。

(6) Facebook

海外研修や探究活動に関する親和性の高い Facebook を活用した。用途の例として、研修日程の共有、研修内容や写真・動画の共有、Facebook messenger が挙げられる。生徒チームが自走していく上では使い勝手が良く、教員の目が届くところで校内外の関係者との情報共有がしやすい。



4. 研修の成果

(1) 対話文化の根付き

中学段階で哲学対話を行ってきた参加生たちは、研修開始当初から、議論の際に自然と円を作って対話を行ってきた。参加生徒選抜の前からドイツに関する文献を読み、目的を持って研修に応募してきた生徒もいるが、チームでの議論や、さらなる文献購読により、より真理に迫る対話を実践することができた。現地渡航がかない、なぜそのような対話が必要であるのかについてさらに肌で感じて帰国した。

帰国後は、地域に、哲学すること・対話することをもたらす探究的な問いを立てた生徒が多かった。

(2) Open-minded な姿勢と能動的市民性・アクションの創発

帰国後、目の前にある物事が自らの探究活動や進路活動につながるか否かがわからなくても、積極的に学校内外に活動の範囲を広げ、挑戦をする姿勢が見られた。例えば、他地域のツアーに参加申し込みをする生徒や、地域住民に対面・オンラインで積極的にインタビューを行う生徒が出始めた。特に象徴的であったのは、本研修参加者の中から生徒会活動の中で提案をし、中高全生徒を巻き込んだウクライナ支援のための講演会とメッセージの作成を実現できたことである。このことは、

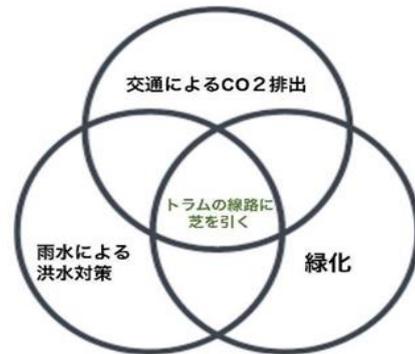
テレビでも報道され、後日、本校運営指導委員で OECD 教育スキル局シニア政策アナリストの田熊 美保氏からも称賛の声をいただいている。

例えば、他地域のツアーに参加申し込みをする生徒や、地域住民に対面・オンラインで積極的にインタビューを行う生徒が出始めた。特に象徴的であったのは、本研修参加者の中から生徒会活動の中で提案をし、中高全生徒を巻き込んだウクライナ支援のための講演会とメッセージの作成を実現できたことである。このことは、テレビでも報道され、後日、本校運営指導委員で OECD 教育スキル局シニア政策アナリストの田熊 美保氏からも称賛の声をいただいている。



(3) 複眼的思考の定着と発散収束の螺旋的思考

生徒は帰国後に事後研修として、レポート作成を行った。報告会などの発表は日程を調整中ではあるが、作成の進んだレポートの内容からは、一つの問題につき、単一目線からの解決方法ではなく、問題をあらゆる学問分野から学際的に策を考えることができるようになってきている。複数の問題を一度に解決するモデルを作り、双葉郡から実践を始めていこうと考える生徒も出始めている。(下図)



(4) ルーブリックの生徒記述より

今後 B 英語活用力・E 他者との協働・F マネジメント力・I 能動的市民性の上昇は十分に見込まれるが、生徒ルーブリック記述とでは、以下のようなものがあつた。(原文ママ)

B 英語活用力

・ドイツの子や先生とは、移動時間やステイ中に原稿が無い会話も出来たが本当の英語圏だとそうはいかないと思っている部分がある。

・ドイツ研修でドイツの高校生と交流をする時に、福島のことや私たちの学校のことなどについて準備した英語で発表し、その後簡単な質疑応答をしたり感想を話して貰ったりした。お茶会の時やホームステイの時にも相手に気になることを質問したり、逆に質問に答えることが出来た。

E 他者との協働

・ドイツ研修メンバーのチームワークは良いものだった。一言で「良かった」とまとめてしまうのは恐れ多いが。もちろん弱音を吐く時もあったし情報伝達が噛み合わない時もあったけど最後見えた景色はチームワークあってこそかなと。

・私は部活動に所属しておらず、放課後の時間は空いているため、プレゼン作成を自分のペースで進めることができた。だが部活動に所属しているメンバーは放課後自分で使うことのできる時間が限られているため、作成を計画的に行うことが難しい仲間もいた。昼休みや部活動のない放課後の時間を利用し役割を分担してパワポ、原稿の作成を進めてきた。またホームステイ期間はホストファミリーの家事の手伝いを行った。各家庭にそれぞれの生活スタイルがあるがそれを海外で経験したことにより異文化交流を通して他者理解にもつながることができたと思う。

F マネジメント力

・ドイ研メンバー全体でなら適切な役割分担なども出来ていたが、個人としては計画立てるのもマルチタスクも苦手なのでまだ5段階評価の2。

・指示をもらわないで行動するのはまだこわいと思う。

・レベル4に上がるためには「作業を適切に役割分担する」能力を身に着けるべきだと感じている。今回の研修では一人一人のスケジュールがある中で事前研修等を組み立てていたためどうしても偏りが出てしまった。

I 能動的市民性

・ドイツ研修の目的に他者還元があり、私も大切にしている。変革者の一歩として報告会で学校の人たちに良い影響を与えたい。

・研修参加前までは社会問題を他人事として捉えていたわけではないが、自分自身にできることを考えたりその問題に対して自分の考えを持ったりすることは、なんとなくでしかできなかった。

「動物会議」の哲学対話を通して、日常にある問題を深めて考えることを始めとし、現地へ行き様々な問題に触れていく中で、日本に置き換えて考えてみた。ドイツの学際的な考え方を浸透させるべきだと思い今の探究内容に至っている。ドイツの課題解決をする際の根本的な考え方を学べたことは、自分の価値観を見直すきっかけとなった

とともに、社会問題や身近なことに当てはめて考えてみると視野を広めることができると思った。学際的な考え方をを行うことは「社会の主体としての意識を持ち、社会がより良くなるための考えを持つことができる」に繋がると感じた。



2. 4. 2 ニューヨーク研修

本校が SGH 指定校であった期間から続く本事業は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い中止や代替を余儀なくされていた。SGH 指定最終年度となった 2019 年度(本校 4 期生)およびグローバル型初年度の 2020 年度(本校 5 期生)、そして昨年度(本校 6 期生)も渡航を断念してきた。このような状況のため 3 年に渡って国内での代替研修を実施してきていたが、今年度(本校 7 期生)は 3 期生以来 4 年ぶりにニューヨーク現地への渡航が可能になった。

(1) チームビルディング

本研修は、教員主体の語学研修や、探究活動の広報活動とは異なる。地球市民としての生徒たちが、能動的市民性を大いに高め、地域や世界に貢献していくために生徒主体で進めるプロジェクトである。

本研修のミッションを自覚し、国際社会で提言をしたという意志を持った 8 名の生徒たちが選抜される。(これまでは最大 12 名の生徒を選抜していたが、今年度は渡航に関わる旅費が例年と比較しても非常に高くなっており、人数減に至った。) 原子力災害からの復興にかかわる自分たちが、世界の人々とともによりよい未来を目指すためには、どのような相手と議論をし、どのように提言をすべきかから生徒たちは議論を重ねる。研修前後には積極的に地域と学校に学びの成果を還元する。

参加者 8 名を選抜する際には、以上の観点を踏まえた内容および自分の探究と地域・世界とのつながりについての志望理由書を重要視し選抜した。

これまでと大きく異なる点として、3 年間渡航を断念してきた生徒たちの思いを受け継ぎ、強い使命感を持って研修に臨む必要があるということ全員を確認した。

(2) 事前研修①(伝承館研修、語り部交流会)

期日：令和 4 年 12 月 21 日(水)

令和 5 年 1 月 23 日(月)

令和 4 年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の一環として、NY 研修参加生徒 7 名で東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れ、当時の被害状況への理解を深め、福島の実況の課題について把握した。

上記イベントに参加できなかった生徒 1 名について、後日伝承館で行われた令和 4 年度「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部交流会」にオンライン参加し、プレゼンテーションを用いて自身の被災体験と現在の学校生活について発表を実施するとともに、県内高校生の被災体験や取り組みについての発表を聞いた。

これらの事前研修は後述する事前研修②(会津大学留学生との交流)に向けた準備と NY 現地で発表するプレゼンテーション作成において効果的であった。

(3) 事前研修②(会津大学留学生との交流)

期日：令和 5 年 2 月 20 日(月)

会津大学主催のプログラム「2022 年度東日本大震災・原子力災害伝承館と福島ロボットテストフィールド等視察」へ参加した。同プログラムでは上記 2 つの施設に加えて請戸小学校を訪れ、福島が抱えてきた課題と復興への取り組みを客観的にとらえ、今後革新的な未来のために何ができるかを実感することを目的としている。

会津大学からは 13 名の留学生を含む 21 名が参加し、本校 NY 研修生徒 8 名、留学生 2 名と合わせて計 31 名がグループに分かれて研修を行った。

英語を用いたコミュニケーションのみならず、外国人から見た福島の影響や、専門分野を学ぶ大学生ならではの思考から未来の可能性について共に探る良い機会となった。



(4) 事前研修③(その他)

期日を問わず、以下の内容を事前研修として実施した。

- ・英語コミュニケーションのトレーニング
- ・課題図書『This Very Tree』(Sean Rubin 著)
- ・課題図書『災害ユートピア』(Rebecca Solnit 著)
- ・課題図書 教育関連書籍を各自 1 冊選択
- ・社会科教員による 9.11、アメリカ史講義
- ・映画『1/10 Fukushima をきいてみる 2022』鑑賞会&交流会参加
- ・小玉直也氏(NPO 法人アースウォーカーズ)との懇談
- ・NHK Special 混迷の世紀 第 9 回「ドキュメント国連安保理〜密着・もうひとつの「戦場」〜」視聴と哲学対話
- ・UNIS-UN 2023 Conference Debate 練習

上記に加えて、NY 現地でのプレゼンテーションに向けたスピーチ作成、スライド作成、プレゼンテーション練習、UNIS-UN Cultural Showcase で披露するダンスの練習等を実施した。

(5) ニューヨーク現地での研修

期日：令和5年3月10日（金）～18日（土）

活動内容：

① 国際機関関係者との意見交換

国連日本政府代表部による「国連とSDGs」に関する講義を聞き、福島私たちが持続可能な世界の実現に向けて何をすべきなのかを考える。また、各国の国連関係者に福島復興に向けた自身の実践について発表を行い、持続可能な世界の実現について意見交換を行う。

② UNIS-UNでの各国同世代との交流

国連職員の子弟等が通学するUNIS（国連国際学校）が主催し、各国の高校生が参加する生徒国際会議UNIS-UN（会場：国連総会会議場）に参加し、各国の同世代とグローバルな課題について議論を行い、交流する。（2023テーマ：Turning the Page: A New Chapter in Education）

③ 現地NPOと連携した同世代生徒意見交換

現地のNPOと連携し、NYの多様性を包含するコミュニティ形成について学ぶとともに、市内在住の同世代に福島復興に向けた自身の実践について発表し、グローバルな課題について意見交換を行い、交流する。

④ 現地行政職員との意見交換

NY市の職員に向けた自身の実践について発表し、福島と世界の課題解決について意見交換を行う。

⑤ シティズンシップに関するフィールドワーク

The Apollo Theater や Schomburg Center for Research in Black Culture で、NYにおける黒人文化の歴史と、その記憶の伝承等について学ぶ。また、9.11 Memorial Museum の視察と意見交換を行う。

⑥ 生徒たちの計画による自由研修

多様性と能動的市民性が息づくニューヨークの文化を体感する。また、異国の地で行き先や移動手段も自分たち自身で計画し行動する経験を積む。

プレゼンテーション発表内容：

『Paying it forward
from Fukushima』



2011年3月の東日本大震災・原子力災害発生時の自分たちの体験とふたば未来学園入学後に学んだことを踏まえて、次世代への「恩送り」として地域社会あるいは世界に向けて活動していることを紹介し、福島の現状の課題を解決に導くための対話の場（Open Dialogue）の必要性を訴える内容である。 ※Canva でスライド作成

3月10日（金）

3/10（金）10:05 発の飛行機に乗り、12時間かけてニューヨークへ向かい、午前9:00にニューヨークに到着。生徒の中には海外渡航経験がある者とそうでない者がいたが、ニューヨークは全員初めて訪れた。

初日は、NY市役所の Chisato Shimada 氏、同僚の Christopher Haight 氏、Naiyiri Booker 氏をホテルの一室に招き、用意したプレゼンテーションを見ていただき、対話の時間を設けた。

Christopher 氏と Naiyiri 氏はNY市役所公園局の水に関わる（川、池、海、湿地等）研究者の方々である。プレゼンテーション内で言及した福島の原発処理水の問題を中心に、生徒の探究活動のヒントになるようなアドバイスを多数いただいた。



午前0:00（日本時間3/11（土）14:00）、ふたば未来学園では震災追悼式が執り行われており、生徒たちはzoomをつないで式へ参加し、黙祷を捧げた。

3月11日（土）

2日目は黒人文化の原風景が残るハーレムでの研修である。国連ユース代表でNPOを運営されている Jadayah 氏と合流し、まずは The Apollo Theater を見学した。Mr. Apollo こと Billy Mitchell 氏が見学ガイドを務め、The Apollo Theater の歴史や自身の生い立ち、The Apollo Theater という施設は何なのか、ハーレムはどういう街なのかについてお話をいただいた。

The Apollo Theater のステージは Stevie Wonder や Michael Jackson (The Jackson 5) など名立たるパフォーマーたちがパフォーマンスをしてきた長い歴史がある。Mr. Apollo によって一部の見学参加者がステージに立ってパフォーマンスをすることを求められたため、後日参加予定の UNIS-UN の Cultural Showcase のために練習してきたダンスを生徒全員で披露するという貴重な体験をすることができた。



その後はモスクの外観を一目見てから、African Market の散策を実施。セネガル出身の方が開いた店内に案内していただき、Africa in Harlem という取り組み・考え方や、黒人やアフリカに住む人々に対する偏見についての話を聞く機会に恵まれた。

午後は黒人文化の歴史のアーカイブが残る Schomburg Center の見学と、ハーレムの学生たちとの交流を実施した。アイスブレイクのゲームで親睦を深め、生徒が準備したプレゼンテーションを発表した。ハーレムの学生たちは最初は福島のことをほとんど知らなかったが、発表を通して、福島が直面している風評被害や処理水の問題と、黒人差別の歴史やミシガン州フリントの水汚染公害問題を重ねて、共感しながら真剣に聞いてくれた。発表後にも多数のコメントをいただいた。

ホテルに戻ってひと段落した後、プレゼン発表と The Apollo Theater でのパフォーマンスを動画で見て振り返りを実施した。

3月12日(日)

3日目は初めて自分たちで地下鉄を使って移動することとなったが、逆方向の列車に乗ってしまった。全員で協力しながら丁寧に確認すること、誰かに任せっきりにしないこと、分からなかったらとにかく誰かに聞くことの大切さを学んだ。

到着後、9.11 家族会の Meriam 氏と1日目もお世話になった Chisato Shimada 氏の案内で World Trade Center 周辺の散策を行った。Meriam 氏は写真を見せて当時を振り返りながら、9.11 の出来事について丁寧に説明して下さった。

9.11 の事故から蘇った World Trade Center 一帯とニューヨークシティ全体の復興のシンボル“Survivor Tree”のもとを訪れることができた。この木については事前研修で絵本“*This Very Tree*”を全員が読んでおり、実物を目の当たりにして感動の声が漏れた。また、Saint Nicholas Greek Orthodox Church & National Shrine を訪れ、礼拝堂のモザイク画を鑑賞したり、追悼のロウソクをお供えしたりした。



9/11 Memorial Museum の視察では、事前研修で複数回訪れた東日本大震災・原子力災害伝承館と同じ役割を有する施設の見学を通し、歴史を後世へ伝え残すこと、それを学ぶことの大切さを改めて感じる事ができた。

いったん解散し、3 班に分かれて自主研修を行った。各班がそれぞれ自分たちで行先を決め、時間通りに目的地へたどり着けるように行動した。ニューヨークの観光名所を訪れたり、現地の人々とコミュニケーションを取ったりする体験を通して、海外での生活を肌で感じる事ができた。

集合後は、本校の NY 研修で縁のあるロバート柳澤氏のご自宅を訪問した。Meriam 氏を始めとする 9.11 家族会の方々にも集まっていたいただき、生徒によるプレゼンを実施した。家族会の方々には真摯に生徒のプレゼンを聞き、多数の質問とコメントをして下さった。用意していただいたご馳走をいただく中で、日本に留学予定の学生とコミュニケーションを取ろうとする生徒の姿も見られた。

ホテルに戻って反省会を行った。生徒たちは「対話の大切さ」をプレゼン発表しているが、これまでの3日間で経験した言いたいことがあっても英語で答えられないもどかしさや、周りの様子を窺って自分から一步を踏み出せなかったこと、聞かれていることが分からなくなってしまったこと等を振り返り、自分たちがこの研修を通してどう変わりたいか、明日からの取り組み方や姿勢について考え直した。振り返ると、この日の反省会が後の研修内容に大きく良い影響を与えたと思われる。

3月13日(月)

4日目、昨晚の反省を踏まえて朝早くに集まり、学んだ内容の共有と、本日から始まる UNIS プログラムの内容の予習をした。

午前中は国際連合日本政府代表部を訪問し、志野光子大使、大嶋勝公使のお二方にご挨拶をさせていただいた。生徒は事前研修として視聴した NHK スペシャル 混迷の世紀 第9回 「ドキュメント国連安保理～密着・もうひとつの“戦場”～」の感想と、それを踏まえた対話の内容、自分たちの考えと NY Project の取り組みについて報告した。志野大使と大嶋公使からは激励の言葉をいただき、その後生徒の探究活動に関する質問を基に対話を行った。

続いて児玉啓佑参事官にご挨拶し、国連やSDGs、児玉参事官自身の取り組み等についてのブリーフィングに参加した。プレゼンテーション披露では「想像以上に素晴らしいものでした」と感想をいただき、プレゼンをより良くするためのアドバイスや処理水問題への言及、また生徒からの質問に対して、探究活動への助言やチームプロジェクトにおいて大切にすべきことなどを教えていただいた。

午後はUNIS (United Nations International School) のプログラムに参加した。Cultural Showcase には各国の高校生が参加し、自国の文化を紹介するパフォーマンスを披露した。本校生徒も事前に申し込みをしており、何度も練習したダンスで会場を盛り上げることができた。生徒は国籍が異なる相手とでも感動を共有できる楽しさや達成感を感じたようだ。



その後は生徒の希望に応じて2つの Workshop へ参加し、周りの外国人生徒とコミュニケーションを取ったり、協働して作品を作り上げたりした。一回目の Workshop で上手くいかなかったことを踏まえて、二回目では勇気を出してアクションを起こすことができたという生徒の話も聞かれ、大きく成長を感じる一日となった。

3月14日 (火)

5日目は国連国際学校 UNIS (United Nations International School) が主催する生徒国際会議 UNIS-UN へ参加した。世界中の学生が国連本部の General Assembly Hall (総会議場) に集い、講話を聞いたり Debate をしたりするプログラムである。本校はGERMANYとGHANAの席に割り当てられた。

【Day1 Keynote Speaker (講演者) と概要】

- Mr. Christopher de Bono, Deputy Director responsible for Communications, UNICEF 気候変動によって教育の機会を奪われる子どもたち
- Sheikh Manssour bin Mussallam, Secretary-General, Organization of Educational 教育で何を学ぶべきか
- Dr. Lauren Rumble, Associate Director Gender Equality for UNICEF 教育のジェンダー平等、女性の教育機会均等について

生徒は英語で長い講話や議論を聞き取ることに苦労していたが、分からない単語をリストアップしたり、スマートフォンの音声入力機能を駆使して文字起こししたりしながら、必死に食らいつく姿が見られた。

Day1 の Debate Motion は "Incorporating AI into education will have positive or negative effects" であった。事前に選ばれた学生が議論するのを聞き、最終的に投票を行う。事前研修でALTの協力の下、立場を決めて理由や根拠を考えてきたこともあり、いくつかの例や単語について聞き取って自分なりに考えることができたようだ。Day1 プログラム終了後は国連本部ツアーに参加し、安保理の会場等、国連本部の内部を見ることができた。



ホテルに戻り、明日の Day2 にどう臨むかを全員で考えた。学んだ内容を記録していくことよりも、リアルタイムで言われていることを理解・共有してみんなで考えていくということを目指し、誰が何を担当するか、どのような配置で着席するかを決め、よく耳にした表現や単語の意味を確認した。

3月15日 (水)

14日に引き続き、UNIS-UN Day2 へ参加した。

【Day2 Keynote Speaker (講演者) と概要】

- Dr. Roser Salavert, Co-Founder and Director of the NYS/NYC Professional Development 「他人の靴を履く」思いやりのある教育システム
 - Soraya Fouladi, Founder and CEO of Jara e-ラーニングの普及、The Jara Unit の紹介
- ※上記に加え、Student Moderated Panel Discussion

反省を生かして席の配置を変え、各自が必死に自分の役割を果たそうとしている姿が見られた。同じテーブルに座った羽黒高校の生徒と先生も巻き込んで、考えを深めるために一緒に対話をした。これまでの準備や事前研修で学んだ単語・表現、毎晩反省を重ねて新たに増えた語彙のおかげで、生徒からも「今こういう話してたよね」など話の内容を確認しようとする声が聞こえてきた。

Day2のDebate Motionは“Education should be private rather than public.”であった。結果的に指名されることはなかったが、本校ならではの視点から様々な要素について考え、質問を準備して挙手することができた。3期生ぶりのUNIS-UNの現地参加はハードルの高いものだったが、生徒は色々な新しい経験をしたり、教育の世界的な問題について自分事として考えたりする機会を得ることができた。

夜は2日目に一度訪れた The Apollo Theater で Amateur Night というライブイベントを鑑賞した。子供から大人まで幅広い年代の挑戦者が性別・人種も関係なく自らの才能を発揮するためにステージに立ち、歓声やブーイングを浴びるという、アメリカ・ニューヨークの大衆文化を肌で感じる良い経験となった。



ホテルに戻った後は、プレゼンテーションの最終発表に向けて、児玉参事官のアドバイスを参考にプレゼン発表の原稿とスライドを調整した。生徒は眠気に抗いながら声を掛け合い、助け合いながら最終調整に取り組んだ。

3月16日(木)

最終日となる7日目は、国連本部Civil Society UnitのHawa氏や、UN Youth Representativesの皆様、福島島の課題と世界の課題を重ね合わせつつ、持続可能で平和な世界の実現に向けた提言を盛り込んだプレゼンテーションを行った。発表を終えてスタンディングオベーションをいただき、生徒からは泣きそうになったという感想を聞くことができた。

国連関係者の方々、プレゼンを通してふたば未来生の取り組みや福島・日本の現状をよく理解できたと仰っていた。また、発表内容について、対話・交流の場を開くことの大切さ、そしてそこから生まれてくる新たな分断に立ち向かうための助言をくださった。生徒たちのこれからの取り組みに期待し励ましてくれる声かけの数々に、生徒たちは安堵しながらも身の引き締まるような思いだったと思われる。



現地での研修プログラムを一通り終えて、生徒からは「色々な経験と失敗ができて良かった」「周りのメンバーを尊敬できた」「人生が変わった」という感想が聞かれた。帰国後は、学んだことを報告・共有・実践していく使命を果たすことになる。ひとまず4年ぶりのニューヨーク現地での研修は成功に終わったと言えるだろう。



※3月17日(金)、3月18日(土)は移動日

(6) 成果と課題

チームビルディング

メンバー選抜において、自分の探究と地域・世界とのつながりについて志望理由書に書く必要があったことで、全員が探究活動の内容を深く振り返ることにつながり、それぞれの取り組みを深化させようという意識づけをすることができた。また、顔合わせの際に、3年間渡航を断念してきた生徒たちの思いを受け継ぎ、強い使命感を持って研修に臨む必要があるという話をしたことで、メンバーに責任感が生まれた。ドイツ研修に参加した者とそうでない者、海外渡航や国際交流経験の豊富な者とそうでない者等、多様なメンバーを選出したことで生徒間での学び合いが活発に生まれた。結果的に8人という少人数編成になったことでチームの結束力が高まりやすく、仕事をスムーズに分担することができた。しかし、学校や地域への学びの還元、学び合いの効果の最大化を考えると人数を確保することも考慮すべきである。

事前研修

事前研修は現地での活動を有意義なものにするべく、大きく分けて、①プレゼンテーション作成のために福島・世界のことを知る、②ディベート等を含めた英語によるコミュニケーション・思考の強化という2つの軸で行われた。講義やフィールドワーク、多くの対話の機会

を通して、グローバルな視野を持つこと、世界の諸問題についての基本的な知識を身に着け、関心を持てるようになるという目的は達成することができた。

また、各自の英語トレーニング以外は基本的にチームで協働して取り組むことで、チームプロジェクトの進め方を学び、実践するという経験が得られた。これまでの研修等では実現できなかったレベルでの「チームでの協働」ができたということは生徒全員の総意のようである。チーム間での連絡共有に Facebook グループを使用したこと、プレゼン等の作成に Google Document や Canva を使用したことで、アーカイブとしての機能を有しつつ同時作業で効率的にプロジェクトを進めることができたこと、関係教員からのフィードバックが容易であったことも1つの大きな成果である。

また、事前研修の内容に加えて、UNIS-UN 2023 のトピックであった教育の問題に関連するポスターを作成する課題・授業を行ったことは、研修に参加していない生徒も巻き込んで思考を深めながら、研修生徒の学びを他生徒へ還元する役割も果たしていたと言える。

課題として、旅行費用や日程の調整に時間がかかったことが大きく影響しているが、準備時間に余裕がなく、書籍を読み込んで内容を深掘りすることまではできなかった。また、英語力改善のためのトレーニングは自主性に任せる形になり、十分に実施できなかった点にも課題が残る。

生徒が作成したポスター



ニューヨーク現地での研修

全体を通して、英語でのコミュニケーション（特にリスニング）で困難を感じる機会は多く、生徒は英語学習に対する強い動機付けを得ることとなった。また、普段の授業においても、ただ原稿を読むようなものではなく、ディベート等で必要とされる即興性と論理的思考力に英語活用力を組み合わせさせたトレーニング等、より実践的な英語力を醸成する内容を考案していく必要性が感じられた。一方で、教科書で学ぶ基本的な英文こそがコミュニケーションの核となるということも併せて意識づけできると良いと感じた。しかし、生徒が研修の中で積極的に相手に話しかけたり言葉を発しようとしたりする姿が見られるようになったことは大きな成果である。

研修終了後に取得したルーブリックの自己評価からは、生徒が NY 研修を通して自身を大きく成長させることができたと感じていることがよく分かる。下記の資料は NY 研修に参加した 8 名の生徒のみを対象とした、1 年次以降から取得しているルーブリックの自己評価の平均の推移である。NY 研修後の振り返りでは、すべての項目が大きく数値を伸ばしており、生徒自身も最も伸びたと感じる能力として特に B(+1.25)、E(+1.25)、G(+1.50)、J(+1.13)を挙げている。研修を通して得られたモチベーションを高く維持して、今後の事後研修や学校・地域への学びの還元をしていきたい。

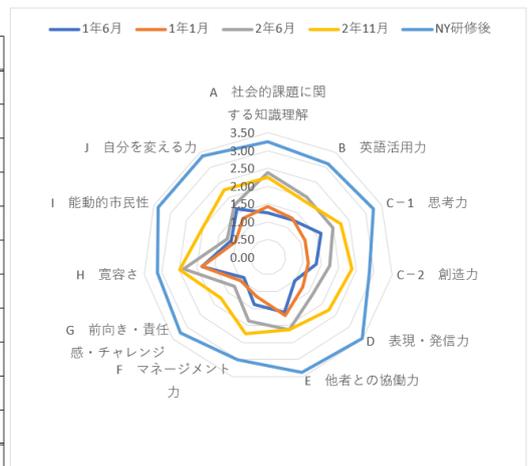
【生徒のルーブリック反省・感想】（一部抜粋）

- ・「研修の中でメンバーの良いところをたくさん見つけられたし協力できた。」
- ・「最初は何を言っているのかわからなくて会話も避けていたけど、後半になるにつれて聞き取れるようになっていった。」
- ・「プレゼン中、聴衆が良い反応をしてくれた事がとても嬉しかったため、これは自分もできるようにしたいと思い、メンバーと一緒に挑戦していた。」
- ・「ニューヨークの人にとっては相手の時間を無駄にしないことが礼儀（日本人の謙虚な性格は時間が無駄になる）と学び、テキパキと接するようになった。」
- ・「自分がやっている探究が、世界で起きている問題と共通点があることに改めて気づかされ、本当に全部他人事じゃないんだと思った。」
- ・（後輩へ）「心から頑張ってたよ良かったと思える。迷ってる人は絶対挑戦してほしい。」

【資料】ルーブリックの平均値の推移

7期生 ルーブリック評価の推移（2021年6月～2022年11月、NY研修）

	1年6月	1年1月	2年6月	2年11月	NY研修後	推移グラフ
A 社会的課題に関する知識理解	1.25	1.43	2.38	2.25	3.25	
B 英語活用力	1.25	1.29	2.00	1.88	3.13	
C-1 思考力	1.63	1.14	2.00	2.25	3.25	
C-2 創造力	1.38	1.14	1.75	2.38	2.88	
D 表現・発信力	1.00	1.29	1.63	2.25	3.50	
E 他者との協働力	1.63	1.71	2.13	2.13	3.38	
F マネージメント力	1.38	1.14	1.88	2.25	3.00	
G 前向き・責任感・チャレンジ	0.88	1.00	1.25	1.75	3.25	
H 寛容さ	1.88	1.86	2.38	2.50	3.13	
I 能動的市民性	1.13	1.00	1.25	2.00	3.38	
J 自分を変える力	1.63	1.29	1.75	2.25	3.38	
平均	1.36	1.30	1.85	2.17	3.23	



※本校ルーブリックについての詳細は「4 実施の効果とその評価」参照。

2. 4. 3 広島研修

福島の復興を目指し学ぶ私たちは、原爆被爆から復興し、核無き世界を目指して世界に発信をし続け、歴史的使命を果たしてきた広島の在り方から、多くのことを学ばなくてはならない。未来創造探究をより深化させ、未来を切り開く一歩とすることを目指し、広島県立広島国泰寺高等学校と連携して下記の通り広島研修を実施した。

(1) 日程・参加生徒

10月28日から30日の二泊三日で行った。例年は二年次10数人を対象とした研修であるが、本年度は一・二年次25名が参加する大規模なものとなった。内訳は一年次20名・二年次5名、男女比は男子4名・女子21名であった。

(2) 事前学習

事前学習として本校と協定を結んだ早稲田大学との協働で開催した1F地域塾に生徒は参加した。1Fとはイチエフと読み、福島第一原子力発電所の通称である。戦災からの復興を果たした広島に学びに行く前に、福島県・浜通りが抱える原発事故および廃炉事業が抱える問題と未来について考察することを目的とし、第0期全4回に参加した。



地域塾は本校を会場とし、地域の方や大学生、専門家や事業者（東京電力）が参加した。全体会で基調講話を聴いたのちグループに分かれて意見を出し合い、最後に分科会で出された意見を共有する流れになっており、9月17日の第三回1F地域塾では、実際に第一原子力発電所の見学も行った。

(3) 実施内容（10月28～30日）

初日は広島の国泰寺高校へ赴き2年生と授業に混ぜてもらい新エネルギーについてディスカッションを行った。その後ホテルに荷物を置いたのち平和記念資料館へ。たっぷり2時間弱見て回ることができた。

二日目の午前中は国泰寺高校有志とディスカッションをした。全体テーマを「ヒロシマとフクシマの高校生でいること～復興・継承・未来について～」とし、広島の

生徒に「福島のイメージ、小中のころの平和教育、ヒロシマの高校生だと意識する体験」本校生から「広島のイメージ、平和資料館の感想」を出し合い、フリーディスカッションでは「そもそも何のために後世に伝えていくのだろうか?」「最後の話者」がいなくなる広島の伝承」「自分たちの世代がフクシマを伝える「最後の話者」であること」について話した。



「広島で福島で生まれたからってそういうのを期待されるのも重い」という意見や「伝承する意味ってあるの」という意見も出た。教員からは「人間の愚かさを舐めないほうがいい（だから伝えていかなければ）」とコメントがあった。

13時からは梶本淑子さんによる被爆体験講話。メッセージ性の強い重みのあるお話で、終了後も生徒からは質問が挙がった。次いでボランティアガイドのさんに平和祈念公園と市内南東の陸軍被服支廠跡のガイドを受けた。午前中に「別に伝承しなくとも」と出たところで、被爆者の方から「伝えていくべき!」と訴えられ、最後の被服支廠では「残したものをどう活用するか」を考える展開になった。三日目は宮島を見学し帰路についた。

生徒からは次のような感想が出された。

「大人になるにつれ、話せる自由が制限されるような気がする。子どもは、立場がないから語れるものがあり、それが強みかもしれない。何でも質問できる今のうちに知識をつけたい」「原爆ドームは核廃絶を願う世界的テーマの象徴。1Fの遺構化は何のためだろう」「ふたば未来には原発事故を語ることに對しての押しつけはないけど、期待はされていると思う」「浜通り＝原発というレッテルはやめて欲しいし、浜通りの人だけで原発を考えるのもおかしいと思う。福島、日本全体で考えていかないと」「忘れるということは過去の人に対する冒瀆だと思う」「私たちは梶本さんのお話を聞くのが最後かもしれない。語ろうとする気持ちが宝物なんだよ、と最後に言われた。語ることで相手に伝えられるし、もしかしたら同時に自分も救われていくのかなって思った。」

2. 5. 1 発表・交流

ここでは外部団体が主催する発表会への参加や他校との交流についてまとめる。

2. 5. 1 ふくしま学 (楽) 会

ふくしま学 (楽) 会は早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターが主催する学会である。世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島復興について考える場として毎回多くの方が参加している。今年度も7月31日に第10回が富岡町で、1月29日に第11回が大熊町で開かれた。

(1) 第10回 ふくしま学 (楽) 会

第1部【1F 廃炉の先を考える】で3年次の渡邊光季が「話せばわかる、話せば変わる：いわきを越えた学びを通して」をテーマに報告をした (写真)。



第2部【福島浜通り地域社会の将来像を考える】では3年次の三村咲綾が「ひとりひとりが取り組む防災」をテーマに報告を行った (写真)。



発表資料は以下のサイトに掲載してある。



また、第4部【総括セッション】では本校副校長の南郷市兵と渡邊光季がパネリストとして参加した。

(2) 第11回 ふくしま学 (楽) 会

2年次の佐藤志保が「なぜ処理水の海洋放出に反対運動が起きるのか 創造的未來を考える」をテーマに発表した (写真)。



高校1年生の時のワークショップを通じて、それまでは「何となく危険」と感じていた処理水を、「安全なこと」と思い始めた。しかしその後、処理水放出を巡って、ネット上で賛成派と反対派が論争を繰り返していると知った。賛成派は、国や東電が伝える科学的な安全や海洋放出することのメリットといった「正しい知識」に基づき、「反対派は『正しい知識』を持っていない人」と単純化して攻撃しているという。

このことを通じて「自分の中にも、これに近い思考回路があったかも」と思うようになり、対立の要因は、反対する人たちを理解しようという気持ちが足りないからではないか、と思い調査を始めた。

風評被害への懸念。国策として原発政策を推し進めた東電や国への不信感。原発事故以来続く先が見えない暮らしの不安感、反対の理由は人によって様々なことに気づき、「なぜ反対しているのかに目を向けて真摯に対応しなければ、本当の心配や不安を解消することができない」と考えるようになった。

発表の最後に、聴衆にこう呼びかけた。「問題が起きてから他人を責め、自分は関係ないという態度をとってほしくない。私たちにはいま、考えるチャンスがある」と。

2. 5. 2 ふるさと創造学サミット

(1) 「ふるさと創造学サミット」について

双葉郡8町村内の各学校で行われている「ふるさと創造学」の取り組みを共有し、子どもたちの学びの場となるのが「ふるさと創造学サミット」である。今年度は、富岡町文化交流センター・学びの森に一部の児童生徒が集まり、その他の児童生徒は各校からオンラインで参加する、現地・オンライン併用での開催となった。また、今回で第9回目を迎えたが、初めての双葉郡内での開催となった。

(2) 実施内容

本校からは、高校3年生が「ひとりひとりが取り組む防災」というプロジェクトを行っている高校3年生の生徒が代表として発表を行った。防災×歴史をテーマに、震災の教訓は歴史的にきちんと残されており、それをどのように活かしていくのが重要であると発表した。

また、防災と要配慮の避難の観点から、これまで学校で行われた避難訓練をアップデートしていく必要について説明し、校内の避難訓練を学校の先生と話し合いながら作り変え、避難訓練の後に校内でワークショップを行った。高校生の力が地域の防災力を向上させる必要性があると発表した。



(3) 成果と課題

本サミットは双葉郡内の小中学生と高校生とが交流できる貴重な場である。特に今年度は震災後初の双葉郡での開催という意義は大きい。双葉郡で学ぶ児童生徒達が、お互いにどのようなことに取り組んでいるのかを共有できるきっかけとなった。

その一方で、貴重な交流の場を活かしきれていないという声も挙がった。学びの成果を発表したり意見を交換したりするだけでなく、学校を超えて、町村を超えての協働が今以上に促進されれば、より有意義なサミットになることが予想される。

2. 5. 3 福島県高校生社会貢献活動コンテスト

本コンテストは、地域の課題解決に向けた創造的復興教育を目的として、福島県教育委員会の主催で震災以降毎年行われている。各学校が探究活動を推進する一つのインセンティブとしての位置づけもあり、最優秀賞を受賞すると県知事への訪問という機会も与えられる。本校では令和元年度から本コンテストの積極的な活用を呼びかけており、今年度も以下の4件を応募した。

このうち、書類選考に応募した2件が最終選考に選ばれた。最終選考会は9月10日(日)、自治会館(福島市)でオンライン開催された。県内の12件のプレゼンテーション、質疑応答が行われた。

審査の結果、以下のような結果となった。

<最優秀賞> 1プロジェクト

- ・ふたば未来学園高校 みらい防災
プロジェクト名:「ひとりひとりが取り組む防災」
- ・ふたば未来学園高校
社会起業部カフェチーム
プロジェクト名:「可能性はここから始まる!! Café ふうよ変革者たれ」

<入選(社会貢献賞)> 2プロジェクト

- ・ふたば未来学園高校 ニューヨークチーム
プロジェクト名:「浜通りツアー」
活動名:原子力防災探究ゼミ 個人
プロジェクト名:話せばわかる、話せば変わる
〜いわきを超えた学びを通じて



令和元年度より本コンテストに参加し、過去4回中3回目の最優秀賞を獲得できた。このコンテスト以外にも様々なコンテストがあるため、今後は年間計画を見ながら、長期的な視点で低学年からのコンテスト出場を進めていく必要がある。また、各学校の発表内容が充実しており、福島県でも探究文化が定着してきたように感じる。

2. 5. 4 マイプロジェクトアワード校内選考会

「全国高校生マイプロジェクトアワード」は、高校生の探究活動、マイプロジェクトなどを発表する日本最大級の学びの場である（認定NPO 法人カタリバ主催）。本校では、応募するプロジェクトの質を高め、あわせてプロジェクトからの学びをより深める機会を設定するため、福島県 Summit の校内予選という位置づけで校内選考会を実施した。

校内選考会には高校 1 年生～3 年生まで 14 件の応募があった。1 年生から 4 件の応募があり、早期に探究に取り組み自発的に探究活動を行う生徒も見られた。

審査はマイプロジェクトアワードの審査基準に則り、アクションしていることを前提に、オーナーシップ、コクリエーション、ラーニングの観点で行った。参加した生徒全員に、自身の活動の質をより高めるために、審査を行った先生からコメントを後日配布した。

○マイプロジェクトアワード福島県 Summit

校内選考会概要

実施日：令和 4 年 11 月 21・22・24 日(月・火・木)

内容：発表、質疑応答、審査

審査員：本校教員 5 名、カタリバ 1 名

校内代表を選考する審査会では、「生徒たちのプロジェクトをどう評価するのか」「良いプロジェクトとはどのようなものか」など様々な議論になった。今年度から、初めて未来創造探究やマイプロに関わる先生もいる中で、このような議論ができたことは、審査員にとっても探究やマイプロジェクトの意義を考え直すきっかけになったのではないだろうか。

最終的に 14 件全てのプロジェクトが、福島県 Summit に出場する校内代表に決定した。

選考会を通じて生徒のプロジェクトを評価することは、単に代表者を選ぶだけでなく、本人達の活動をさらに進化させるためにも重要であったと考える。参加した生徒からは、「緊張したけどアドバイスをもらうことができてよかった」、「答えられない質問があったから悔しい。もっと頑張りたい」など、前向きな声が聞かれた。

発表後の質疑応答で、審査員から問いかけをもらう中で、自身にない様々な視点に気づくことができたようだ。

2. 5. 5 マイプロジェクトアワード福島県 Summit

マイプロジェクトアワード福島県 Summit は全国 Summit に向けた福島県予選として、今年度で 3 回目の開催となる「学びの場」である。本校からは校内選考会によって選出された 13 件が参加し、3 年生のプロジェクトである「誰ひとり取り残さない減災・防災」が福島県代表として全国 Summit に出場する運びとなった。

実施日：令和 5 年 1 月 22 日 (日) 終日

実施形態：オンライン

発表数：32 件

本校からの発表テーマ

- 誰ひとり取り残さない減災・防災 (3 年)
- 福島と世界の架け橋プロジェクト (2 年)
- 私たちと少年法 (2 年)
- 葛尾村に人を呼ぶために (2 年)
～葛尾村の自然とツーリングを活用して～
- 川内村の魅力を発信！ (2 年)
- 表現するファッションとは (2 年)
- スポーツブランドをもとに地域を盛り上げる (2 年)
- Come to Futaba (2 年)
- メンタルの状況はスポーツにどう影響する？ (2 年)
- Café ふう売上あげあげプロジェクト (2 年)
- My Dream KIRAKILIVE (1 年)
- 震災教育を教育で終わらせないために (1 年)
- 神社を盛り上げて地域のつながりを作りたい (1 年)



本年度の福島県 Summit は「学びの場」として実施された。生徒達は分科会に分かれ、自分のプロジェクトの発表を行った。分科会では、福島県ゆかりの専門家・実践者の方々や他校の生徒から質問や感想をもらい、自身の活動の内容について対話を行った。発表終了後の振り返りでは、自身の学びや気づき言葉にするとともに、今後の活動をについて考えた。普段は関わりのない大人や他校の生徒との交流を通して、自分の活動の意義に気づき、さらなるモチベーションにも繋がったようだ。

2.6.1 社会起業部の活動

社会起業部は、普段から地域を「知る・伝える・盛り上げる」活動をしており、福島を訪れる高校生との交流や、自分たちも地域や原発事故を考えるためにフィールドワークを行った。またパンフレットやポケットティッシュなどを製作し、交流先への配布を予定した。製作費、およびフィールドワークの費用は福島県の「チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業」の対象である。

(1) 社会起業部×早稲田大学 (4月13日)

社会起業部の新入生歓迎イベントの一環で早稲田大学の学生さんと「オンライン進路座談会」を行いました。

(2) 広野町の限界集落・箒平を訪問 (6月20日)



(3) 灘高校など関西の高校生と交流 (7月28日)



(4) 横浜緑が丘高校さん双葉町をアテンド (8月1日)



(5) 宮城研修 (8月3~4日)

福島県についての説明や食材を寄付することを目的に宮城研修へ。気仙沼東日本大震災遺構・伝承館では社会起業部のように語り部活動をされている気仙沼向洋高校の方と交流しました。南三陸町と石巻でのフィールドワークで津波被害について学ぶとともに、それをどう伝承していくかも考えさせられました。最後に石巻市で子ども食堂を行っているオアシス教会さんを訪問し、福島県産の食材を寄付しました。



(6) 沖縄基地問題学習ワークショップ (8月19日)

年末の沖縄研修の事前学習として明治大学、慶応義塾大学、中央大学の学生さんらとともにワークショップを行いました。

(7) 滋賀県河瀬高校さんと交流 (8月23日)



(8) 「戸村さんに聞くカムのこと」 (10月3日)

大熊町出身で本校のカフェに勤務する戸村さんに、大熊町にあったカムラ洋菓子店についてお話しいただき

した。

(9) 木村さんと沖縄事前研修 (10月19日)

津波で命を落とした家族の遺骨捜索を続ける傍ら、語り部として活動している大熊の木村紀夫さんをお招きして、沖縄研修の事前学習を行いました。みなで沖縄で遺骨収集されている具志堅隆松さんの『ぼくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になったわけ。』を読みました。



(11) 福島放送「シェア！」に動画提供 (6月・10月)



(12) 中央大附属高校さんと交流 (10月27日)

中央大附属高校の川北慧先生は福島と沖縄の類似点を踏まえ、生徒に対して福島研修・沖縄研修を行っている。昨年に引き続き福島研修では本校生徒と交流の機会を作ってくれた。本校での沖縄研修に当たり中央大附属高校さんの沖縄研修に一部相乗りさせていただけることになっている。

(13) 岐阜県の中京高校さんと交流 (12月21日)



(14) 沖縄研修 (12月22~24日)

福島原発立地の構造が沖縄の米軍基地の構造と似ていることに気づき、沖縄県宜野湾市辺野古で基地問題について学習するとともに、福島県の現状を伝えていく2泊3日の沖縄研修を企画した。



事前研修を経て(講義動画を左下リンク先に掲載する)、初日はホテルにて福島県のリンゴを配布しアピールを行った。



二日目は辺野古に移動し、(12)で述べたように中央大附属高校さんと合流、川北先生のもとフィールドワークをおこなうとともに基地移転容認派と反対派の住民のお話をうかがった。



生徒は「原発と基地の構造が似てる。国防のために沖縄が基地を引き受けている」「沖縄・福島・水俣と、住民を分断するような点がある」という感想を持った。三日目はひめゆり平和記念資料館などを訪問した。辺野古フィールドワークの詳細については右QRコード先にある社会起業部 Facebook に記載している。



2. 6. 2 社会起業部カフェチーム

(1) はじめに

「地域を知る・伝える・盛り上げる」ことを目的として、社会起業部カフェチームとして高校の部活動でカフェを運営している。ケーキや焼き菓子の製造、イベントの企画・開催など、生徒主体で活動している。

(2) 実施内容

昨年度までは新型コロナウイルスの影響によりカフェの営業が制限されることが多かったが、今年度に入ってからは徐々に規制が緩和の方向に進むことを期待し、「ご来店いただいたお客様一人一人に楽しんでいただく空間を提供する」をテーマに季節ごとに限定メニューを提供すること、地域のイベントに率先して足を運ぶことを中心として活動した。

(3) 成果

①第7回全国高校生SBP交流フェア チャレンジワード予選 7/30 (土)

3年の和賀菜々香、佐川生華の2名がオンラインにて本校caféふうの取り組みについて発表を行った。A・B・Cの3つのグループごとに予選が行われ、本校はAグループにて予選に挑んだ。オンラインであっても普段のカフェの様子を見ていただきたいと予選当日はカフェチームの1・2年生の協力によりカフェを開店・営業し、営業中のカフェの様子を交えながら発表を行った。

予選ののち、各グループ上位2校が8月に三重県伊勢市にて行われる決勝に進むことができるが、本校は「輝」の受賞とともに決勝進出校に選出され、全国各地において多方面で活躍する方々の前で本校の取り組みについて発表する機会を得ることができた。

第7回全国高校生 SBP 交流フェア チャレンジワード本選(予選)-グループ A 2022.7.30(土)

- 1: 熊本県立天草総合高等学校 天草総合高校 SBP
- 2: 岐阜県立加茂高等学校 森林科学科
- 3: 三重県立明野高等学校 ぶかりプロジェクト
- 4: 三重県立伊勢高等学校南校南校校舎・学生会舎 南伊勢高校 SBP
- 5: 法政大学中学校・高等学校 社会科学部地域調査班・地域創造コース
- 6: ふたば未来学園中学校・高等学校 社会起業部 カフェチーム
- 7: 佐賀県立伊万里東葉高等学校 フードプロジェクト
- 8: 三重県立紀南高等学校 きにゃんプロジェクト
- 9: 三重県立高等学校 ダンス部 SERIOUS FLAVOR



②第7回全国高校生SBP交流フェア チャレンジワード決勝 8/20 (土)

コロナ禍で活動が制限される中で自分たちに何ができるか、コロナ禍だからこそやれること・やるべきことを問い続け、『可能性はここから始まる～caféふうよ変革者たれ～』のテーマを掲げ、三重県伊勢市で開かれた決勝に参加した。決勝ではA・B・Cの3つのグループから勝ち上がった計6校による発表を行なわれた。

本校カフェチームは、入学から今までの活動期間中にコロナ禍での飲食店経営の厳しさや交流を深めることの難しさに直面した経験から、『カフェで待っているだけでは何も変わらない』とカフェを飛び出し自分たちから地域に出向いていくことで新たな交流を生み出そうと試みたことを中心に発表した。今年度のカフェチームは、交流するための活動だけでなく、カフェの経営視点やお客様に喜んでいただく経営・営業とは、といった様々な視点から「Four Seasons Menu」をテーマに取り上げ、季節限定メ

ニューを提供している。今年度最初の限定メニューとして夏限定のメニューを考案・提供した結果、売り上げや集客、お客様の反応にどのような影響があったかを分析・発表した。

輝・NARUMI賞(特別賞) 受

③第7回全国高校生SBP交流フェア 8/20(土)
上記②チャレンジワードの後、三重県伊勢市の皇學館大学にて行われているSBP交流フェアに参加した。普段は双葉郡を中心として活動しているため、全国各地から来場された方々と交流できる貴重な機会となり、改めて自分たちが行っている活動を見つめ直す良い機会となった。また、参加・来店していただいた高校生から、形は違えども同じ高校生が社会貢献・地域貢献や経営、地域活性化など私たちが目指す活動に取り組んでいる内容について、お互いに直接意見を交換でき、新たな発見につながる機会となった。

第7回全国高校生SBP交流フェア

2022.8.20(土)



④ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト 9/10(土)

本校カフェの取り組みについて、「社会貢献」の視点から発表を行った。双葉郡8町村にスポットをあて、1か月1町村をテーマに地域を知り、自分たちも伝統や文化を学ぶことでカフェの活動にそれらを取り入れ地域に伝えていく活動を紹介した。社会起業部カフェチームは日頃から「変化 交流 居場所が生まれるカフェ」をコンセプトとして活動している。そのため、カフェを「交流が生まれる場所」と定義しており、カフェの活動を通して年齢や性別、地域を問わず様々な方との交流の場となるよう活動している。今回はその一助となるよう、地域の伝統や文化について実際に体験し、出来上がったものカフェに置いて紹介することでカフェに足を運んで下さった方に地域の伝統文化に触れていただく・知っていただく活動を発表した。「双葉町のふたばダルマ」を製作し、カフェに紹介POPと共に店頭へ置く、「檜葉町の藍染め」を体験し、作ったスカーフをお客様の目につくようにカフェ営業時に身に着けるなど自分たちならではのやり方で地域の情報を発信し、双葉郡を知っていただく活動に繋がった。他にも双葉郡8町村についてより知っていただくために、カフェ内の壁を使い、中学・高校の美術部と連携し双葉郡8町村をテーマとして壁画も作成し、故郷への想いを感じていただいた。

優秀賞(2位相当)・社会貢献賞
受賞

④ふたばワールド in 双葉(双葉町) 9/23(金)

震災後、双葉地方の交流の場として年1回開催されていたふたばワールドは、新型コロナウイルスの影響で開催が見送られていたが、今年は3年ぶりに双葉町にて開催された。

現カフェチームとしては郊外での初の出店であり、普段カフェにいらっしゃる方々とは違った交流を持つ良い機会であった。当日は、飲み物だけでなくスペシャリスト系列農業が作った広野町産のバナナ「綺麗」を使った「学園マドレーヌ」も販売し、本校のスペシャリスト系列農業の活動とcaféふうの活動の両方を多くの方に知っていただくことができた。また、ふたばワールドを取材にいらっしゃっていた地元テレビ局の方にcaféふうを取り上げていただき、会場に足を運べなかつた方にもメディアを通して活動を伝えることができた。



⑤ならSUNフェス（楡葉町）11/12（土）

楡葉町にて開催されたならSUNフェスに出店した。このような機会を活用し、自分たちから率先して地域の方と交流する機会をもっと持つべきではと考え、自分たちから双葉郡の方々に会いに行こうとイベントに積極的に足を運んだ。



イベントではふたば未来学園にカフェがあることを知らなかつた方もいらっしゃったため、改めて「caféふう」の存在を多くの方に知っていただく機会にもなった。本イベントでは現カフェチームになってから初めて屋外での「ふうブレンドコーヒー」の提供を行った。お客様に美味しいと言っただけのコーヒーを提供したいと普段から懸命にドリップの練習をしていた部員にとってはより多くのお客様と関わることができ、良い経験を積むことができた。

⑥広野町暮市（広野町）12/24（土）

広野町駅前商店街の活性化とにぎわいづくりのために開かれる「広野町暮市 2022」に出店させていただきました。

当日は強風が吹く中での出店となり、いつものようにスムーズにコーヒーを提供するのが難しい環境であったが、コーヒーを楽しむにしてくださいお客様のためにと丁寧にドリッピングし、寒い中でのほっと温まる一杯を提供した。当日は隣接するテントにてスペシャリスト系列農業の栽培担当生徒が自ら大切に育てた鉢植えを販売した。農業・カフェのそれぞれが広野町に元気を届けたいという想いを持って参加していたため、新型コロナウイルスの影響で3年ぶりの開催となった広野町暮市に高校生だからこそ届けられる元気と活気をもらすことができた。



(4) 課題

今年度は、ご来店いただいたお客様一人一人に楽しんでいただく空間を提供することを念頭に運営した。新型コロナウイルス感染症に関する規制が徐々に緩和されるに伴い、店頭での活動の幅が広がっていくことを感じつつも、学校外の方々との交流の持ち方や情報の発信の仕方について、更なる改善の必要性を感じる。学校外の方が学校の中にある「caféふう」に気軽に来店できる雰囲気や環境づくり、SNSによるタイムリーな情報発信など今年度見つけた課題を次年度は生徒主導により解決したい。

併せて今後は生徒主催のイベントを率先して企画し、校内に外部の方を呼び込むことで交流の場としてのカフェの機能を十分に果たせるようにしていきたい。また、他校との交流を持ち意見交換や共同商品開発などを企画し、生徒の中の可能性を広げていくことも課題として挙げられる。

2. 1. 2 演劇

本授業は、劇作家・演出家、芸術文化観光専門職大学学長 平田オリザ先生をはじめ、NPO 法人 PAVLIC より、劇作家・演出家のわたなべなおこ氏他多くの演出家、舞台俳優を講師として招聘し、「地域創造と人間生活」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通して「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分達が思考を深めることをねらいとしている。生徒全員が 20 班に分かれて演劇を創作し、演じた。

生徒達は課題を知る学習における双葉郡 8 町村バスツアーを通して、震災前と後の双葉郡の変容について話を聞き、地域の復興に向き合う。また、演劇の題材となる地域の課題を発見するために、事前に調べ学習をした後、地域の公共機関や商店、企業などを訪問し、フィールドワーク (FW)を行う。生徒たちは復興に携わる地域住民の内面に焦点を当ててインタビューを行い、学んだ内容を演劇創作につなげていく。演劇創作の中では、地域の方を取材し、聞いた話を持ち帰り、議論しながら双葉郡の復興のための核心的な課題を見つけ出す。それぞれが置かれる立場の違いから生じる葛藤や対立など、複雑に絡み合う事象から、解決の難しい課題があることを認識する。生徒は発見した課題や学びを、その後展開される未来創造探究 (探究活動)を通じて探究することになる。今年度はリッチピクチャーを使って自分達の演劇作品を構造化し、探究への問いづくりへ繋げた。

(1) 目的

- ① 学校の所在する広野町の特色や課題の理解を深めるために、自分たちが設定した具体的な課題に基づき、地域住民や企業、公的機関、施設等への取材 (FW)を実践し、地域についての正しい知識を身につける。
- ② 対話劇を創作することで、地域の様々な立場の方々の視点で物事多面的に見つめ、そこで出てきた課題と向き合い、2 年次以降の未来創造探究での活動に繋げる。
- ③ 自分達の学習の成果について、特に伝えたい内容や相手を踏まえた有効な方法を確立し、校内外での発表を通して正しく伝える。

(2) 授業概要

		時間割	学習活動	講師来校
1	5 月 24 日 (火)	5・6	演劇オリエンテーション①	○
2	5 月 31 日 (火)	5・6	演劇オリエンテーション②・取材先を決める	○
3	6 月 13 日 (月)	終日	双葉郡バスツアー (終日)	
4	6 月 14 日 (火)	5・6	バスツアー振り返り/取材先調べ	
5	6 月 21 日 (火)	5・6	演劇創作のための取材	
6	7 月 5 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ①	○
7	7 月 12 日 (火)	5・6	演劇創作のためのフィールドワーク	
8	7 月 19 日 (火)	終日	演劇創作 WS ②	○
9	7 月 20 日 (水)	終日	演劇創作 WS ③・中間発表会	○
10	9 月 13 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ④ブラッシュアップ	○
11	10 月 4 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ⑤ブラッシュアップ	○
12	10 月 25 日 (火)	5・6	演劇創作 WS ⑥ 演劇リハーサル	○
13	10 月 26 日 (水)	終日	演劇成果発表会	○
14	10 月 27 日 (木)	5・6	演劇振り返り&分析・リッチピクチャー作成	

(3) 講師

平田オリザ (青年団主宰 劇作家・演出家)
 わたなべなおこ (劇団あなざーわーくす主宰・劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC 代表理事)
 森内美由紀 (青年団・俳優、NPO 法人 PAVLIC)
 宮崎 悠理 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、河野 悟 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)
 石本 径代 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、有吉 宣人 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)
 金 恵玲 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)、植浦菜保子 (俳優、NPO 法人 PAVLIC)
 北村 耕治 (俳優、劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC)

(4) 対象生徒

1 学年生徒名 1 6 班編成

(5) 授業内容 (抜粋)

1 演劇オリエンテーション

ながら創作をすることで他者と協働する力を伸ばすことをねらいとした。

中間発表会では教員が審査員として入り、地域課題がより多角的・多面的に見えてくるよう、作品の中で足りないところをアドバイスした。視点は以下の3つである。

- 1 取材対象の心理描写だけでなく、地域課題がきちんと描かれているか。
- 2 取材対象に寄り添いすぎて、物事を一方向から見ているか。きちんと相手の背景も描けているか。
- 3 取材相手が何者で、どのような仕事をしているのか、劇を見て分かるようになっていないか。

中間発表会でのアドバイスをを受けて、多くの班が作品をガラッと変えた。その軽やかさもまた、演劇を中学3年間実施してきた生徒たちがいる学年ならではの变化だと思われる。

1.3 成果発表会

本校みらいシアターにて、成果発表会を行った。20班20作品を4グループに分け、グループごとに生徒達による投票を行った。評価の観点には以下のとおりである。

- ①テーマ（広く見てもらいたいと思う内容だった）
- ②発想力（オリジナリティがあり、ユニークだった）
- ③セリフ（心に響く、印象に残る台詞があった）
- ④構成（話の流れ、組み立て方が良かった）
- ⑤演技（迫真の演技、役になりきっていて引き込まれた）

また、FW先をはじめ今年度お世話になった方々にも案内を出し、発表をご覧いただき、フィードバックをいただいた。最優秀賞、平田オリザ賞、校長賞、副校長賞の他に、生徒投票による賞も選出し、表彰を行った。

	班	タイトル	FW先
A	1	2人のこれまでと私たちのこれから	広野町
	1	今	大熊町
	8	震災ととある漁業の話	檜葉町
	1	カワイソウジャ、ナイ	富岡町
	6	大切なもの	大熊町
	9	私とヤギができること	葛尾村
B	1	この先のJヴィレッジは	檜葉町
	5	震災と差別	富岡町
	9	どうかかえてください。	双葉町
	6	新妻さんの軌跡	広野町
	1	大熊はずっとある！	大熊町
	8	罪悪感から使命感へ	双葉町
C	2	東電と私	東京電力
	5	「伝えた」のか「伝わった」のか	東京電力
	1	避難後の住民	富岡町
	3	平山さんと震災	富岡町
	7	困難をのりこえて ～ふるさとノカタチ～	檜葉町

2	数十年後の、未来へ向けて	大熊町
2	大熊と未来の人々の為に	大熊町
0		
1	田中秀昭さんの苦難	大熊町
4		

特に衣装や舞台セットなどはなく、全員がジャージや制服姿で演じたが、それでも情景が伝わったのは、演劇が様々なものを受け手が補完して鑑賞する表現であるからだ。生徒たちは、椅子や机などの少ない小道具を上手に使って防波堤や瓦礫、家、会社などを表現していた。

今年度も、取材にご協力いただいた多くの方が本番を観に来てくださり、丁寧なフィードバックをいただいた。さらに客席では震災直後ではあり得なかった、立場を超えた対話も見られた。極端に言えば加害者と被害者のような関係性だった人々の間に、生徒たちの演劇を通してお互いの当時の想いを知り、お互いの境界を超えて新たな対話が生まれる場面もあった。

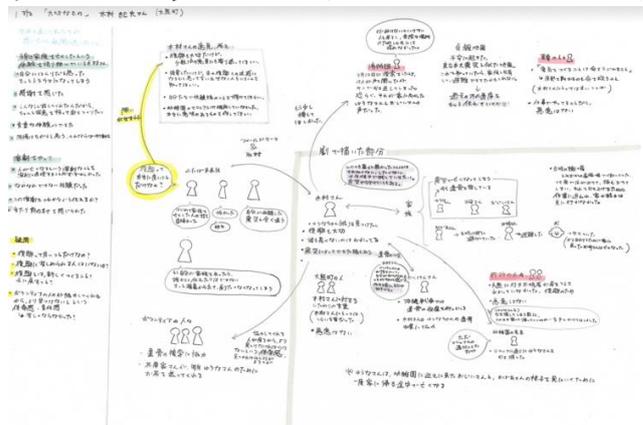
「境界を越える」とは、自らが引いた境界が揺らぐことである。演劇を見ることで他者の記憶を追体験し、自分が自分でありながら他者に「なる」ことで足場を揺るがされるとき、境界が揺らぎ、自分の見方で他者を判断する眼差しは相対化され、その先に対話が生まれるのを感じた。このプログラムが、生徒達だけでなく地域の方々にとっても有意義な時間となっているようである。



1.4 演劇振り返り、リッチピクチャー作成

成果発表会を終えて、これまでのプロジェクト全体を振り返り、個人として・チームとして自分達がどのように成長したのかを言語化し、お互いの成長を讃え合った。その後、今年度初の試みとして、「リッチピクチャー」の手法を用いて自分たちが作った演劇を構造的に分析するWSを行なった。

リッチピクチャー



リッチピクチャーとは、ある人とそれを取り巻く様々な人・モノ・コトと関係性を表現した図のことである。書き方はおおむね次の通りである。

- ①中心となる人を書く
- ②その人に関係する人・モノ・コトを手当たり次第書く

③場合によってはそれらを並べ直し、グループ化する

④線でつなぎ、それを矢印にする

⑤線や矢印に吹き出し等で、その矢印に関わる感情などを書いていく

更に、より内容を整理するために、演劇では描ききれなかった部分の情報を補足させた。生徒たちはイラストを描きながらより相手に伝わるように構造化することができた。最終的にはポスターサイズに印刷し、アリーナにてリッチピクチャーの共有会を行った。自分以外の班のリッチピクチャーを見ることで、20通りの地域課題に触れることができ、その後の探究接続のためのインプットとして大変有意義な時間となった。

(6) 振り返りと評価

今年度、明らかにこれまでとの違いを感じたのは創作までのスピードである。話し合いがスムーズに進んだのは、一貫生が演劇と哲学対話を中学3年間通して経験してきたことが大きい。自分と違う他者の意見を否定せず、共に対話を楽しみながら腑に落ちるまで考え続けることがきる生徒がそれぞれの班に存在していたことで、あらゆる作業がスムーズに進んだ。そういった前向きな姿勢の生徒が大多数を占めていたことで、高入生も自然とその流れに身を任せて創作に集中することができたと言える。実際に、どの班も必要最低限の衝突はあったが、どの班もそれらを乗り越え、誰一人取り残さない姿勢が見られた。何より生徒達が協働作業を楽しんでいた。

また、「地域課題を演劇にする」という一見固くありがちなテーマにも、演劇の良さである「フィクション」を軽やかに取り入れることでどうすればより観客に伝わるかを工夫した。例えば、除染解体作業の現場にいるはずのない女子高生を登場させ、「ねえ、あれ解体じゃない？やばいよね？」といった何気ない会話を挟み、「でも、この人たちどんな気持ちなんだろうね」と、目の前で起きていることを客観的な立場で語るという演劇的にも高度な技術を用いていた。また、解体作業に使われる機械を人間で表現し、瓦礫を撤去する無機質な機械にも感情があるかのような演出をした。

演劇は、舞台上立つ演者同士のコミュニケーションだけでなく、舞台と観客の間のコミュニケーションも成立しないと上手くいかない。4月からの演劇WSを通して、生徒たちの中に、受け手を想像し伝え方を工夫するという能力が積み上がっていると感じた。この力は今後の未来創造探究でも活かされるだろう。

演劇創作は探究に必要な論理的思考と批判的思考のトレーニングの場である。論理的思考は、演劇を作ることで自分が論理的に情報を出していないと相手に伝わらない。批判的思考は、時にはフィクションの力を使って地域が抱える課題を掘り下げることだ。審査員の平田オリザ氏の言葉を借りれば、「探究」とは課題を探究するのではなく、「人間」と人間が作っている「社会」について探究するものだ。人間の複雑さを深掘りすることが重要である。取材をすると、どうしても取材対象に共感してしまい、そのままに伝えたい！という気持ちが起こるが、そこで踏ん張って、その周りを取り巻く複雑な構造を深掘りしてもらいたい。

福島で学び、原発事故、復興、トリチウム海洋放出問題、様々なものをこれから背負わざるを得ない彼らが、この不条理と闘うためには、大人の言うことを全て真に受けるのではなく、批判的思考を持ってほしい。それが演劇をつくる意味である。この経験を活かして2・3年次の探究活動に生かしてほしい。

い。

(7) 次年度実施への課題

振り返りでも述べたように、意見の違いを越えて協働し合える集団づくりは成功したと言える。地域で働く様々な方々の気持ちに寄り添うことができたことは大きな一歩ではあるが、やはり共感だけでは地域の課題解決には至らない。

ブレイディみかこ著「他者の靴を履く」では、これからの世の中エンパシーの力が重要だとある。エンパシーとは「他者の感情や経験などを理解する能力」のことであり、それを「他者の靴を履くことができる能力」として表現している。これに対してシンパシーは「誰かをかわいそうだと思う感情や友情」である。シンパシーとエンパシーの差を示す例がサッチャー元英首相だという。優しく思いやりがあった一方で、衰退した地方の製造業者に厳しく自助を求める経済政策を進め、それに付いて来られない人のケアに心を砕くことはなかったという。「シンパシーはあったが、エンパシーはなかった」と当時の秘書は証言している。人間は顔が見える人（知っている人）の靴は履けても、顔が見えない人たちの靴はあまり履こうとしないものだ。

このことを考えた時に、生徒たちがこの授業を通してなるべく多くの地域の方々と出会い、顔が見える人たちを増やしていくことが、彼らのエンパシーを育てる唯一の方法であると改めて考えた。また、地域の大人たちが考えていることを想像・理解することや、他者の感情を自分も感じるといったエンパシーで完結せず、それが何らかのアクション（未来創造探究）を引き起こすにはどうすればよいかについても考えたい。

演劇を通して他者の人生に触れるだけでなく、その先へ行くにはどうすれば良いのか。震災時の年齢が低年齢化している中、生徒達自身が地域の課題の本質に気付き、時間を掛けてそれらを深掘りする中で基本的な知識をインプットしていく仕掛けや、今年度のリッチピクチャーのように、演劇と探究をシームレスにつなげられるような仕掛けを、次年度に向けてさらに考えて更新していきたい。



2. 1. 3 国際理解教育

本年の「地域創造と人間生活」は、キャリア学習を意識し、コミュニケーション力向上のためのスキル学習を土台として「自分を知る」、「地域を知る」、「世界を知る」の3本柱を軸として授業を構成している。「自分を知る」では、スタディサプリの活用を通して、働くことの意義を考え、自己理解を図る。「地域を知る」では、フィールドワークを通して、双葉郡の現状と課題について知る・学ぶ授業を展開する。そして、「世界を知る」では、世界で活躍する外部講師を招聘し、世界における様々な課題を知り、生徒自身がグローバル社会の一員である自覚をもたせる (Global Citizenship Education)。

(1) 高遠菜穂子氏による国際理解講演会～概要～
イラクで約18年、エイドワーカーとして取り組んでいる高遠菜穂子氏に講話いただいた。高遠氏の体験談を通して、地域が抱える課題を世界の課題と繋げて考え、世界平和や国際理解の意義を考えることを目的としている。

- 1 日時 令和4年12月1日(木) 5, 6校時
- 2 講師 イラク支援ボランティア
エイドワーカー (フリーランス)
高遠菜穂子 (たかとおなほこ) 氏
- 3 対象 本校1年次生徒、教職員

(2) 実施内容

演題『戦争の与える影響』 内容を一部抜粋する。

【世界と日本の難民問題】

難民 UNHCR グローバル・トレンドズ 2021 によると、紛争、迫害、暴力により家を追われた人が過去最多の8930万人(10年連続増加)であり、2011年の2倍に増えている。国境を越えたら難民(現在2710万人)、越えないのが国内避難民(現在5320万人)。第三者は簡単に「なぜ逃げないのか」と言うが、様々なところに関門所があり銃を突きつけられ、殆どの場合は賄賂が必要である。お金がないと逃げられず、逃げるのにも命懸けである。難民最多受け入れ国がトルコ(360万人)であるのに対し、日本の難民認定は毎年50人以下に止まっている。非常に悲しいことに日本の入国管理局による外国人に対する人権侵害は深刻である。死者も出ている。スリランカ人のウィシュマさんの事件は記憶に新しいはずだ。このような人権侵害が日本という平和な国で起きていることを皆さんにはもっと知ってほしい。



【市民のトラウマのほかに、兵士のトラウマも深刻】

戦争によって市民が受けるトラウマ(身体的外傷、心的外傷 PTSD)について、目を背けたくないような写真や映像と共に説明を受けた。その際に印象に残った話が、兵士のトラウマについての話である。

「戦争はおぞましく、信じられないほど残酷だが、最初からモンスターはいない。残酷な米兵も家に帰れば一人の息子であり、優しい父親なのだ。想像してほしい。あなたが軍隊という装置の中で、反射的に攻撃できるよう訓練され、軍の規律に従うよう教育され、戦地の究極の緊張状態の中で「敵を殲滅せよ」という命令を受けたら、攻撃され、仲間の兵士が殺されたら、残酷行為をしてしまうかもしれない。でも、ある瞬間に自分が犯した「罪」を意識し、も

う人を殺したくないと思っても、アメリカの軍法では、それは反逆罪になる。兵士のトラウマは、軍の名誉とされる行為が良心と折り合いがつかないことで生じてくるのだ。」

【PEACE CELL PROJECT について】

高遠さんが現在取り組んでいるプロジェクトについても話を聞くことができた。テーマは「絵本と演劇で紛争を止める」である。このプロジェクトを思い付いたきっかけがまさに本校で演劇の授業と出会ったことだと高遠さんは話している。

絵本の読み聞かせによる情操教育と、演劇を通して彼らの想像力を刺激して、紛争解決できる人を増やしていくのが目的。現在もイラクでは分断が根強く残っている。クルド人とアラブ人、シーア派とスンニ派、イスラム教徒とキリスト教徒 etc...。同じ地域に暮らしながら目も合わせない人たちもいる。現在はコミュニケーションWSが中心だが、最終的には本校と同じように、参加者が自分とは少し背景が重なり合わないような場所に取材に行き、聞いてきたことを演劇にする取り組みにチャレンジしたいそうだ。演劇を通して彼らのエンパシーを高めたいと高遠さんは話していた。(エンパシー:他者の感情や経験などを理解する能力のこと) ※講演会終了後は、本校の演劇作品をいくつか鑑賞し、生徒たちに熱心に質問をしていた。



(3) 生徒の感想

「人間の中には良心と残酷性の2つがあると知った。残酷性のトリガー(引き金)を引かないようにするために想像し続けたい。」

「一国平和主義ではなく、世界の平和を希求するには、軍事行動への参加ではなく、人道支援立国を目指すべきだと学んだ。」

「戦争をしない環境を世界に増やしていきたい」
「自国の安全のために若者たちを戦地に活かせる政治ではなく、紛争を予防する外交・政治を本気でしてくれる政治家を選ばなければならないと思った」

(4) まとめと今後の展望

生徒達は、高遠さんから語られるイラクの現状とその熱量に圧倒されながらも自分達の知識を広げようと真剣にその思いを受け止めた。講演会後も多くが残り、19時近くまで質問が止まなかった。イラク復興と双葉郡の復興を重ねた生徒も多く、探究のテーマに直接繋がった生徒もいたようである。まずは身近な社会から変えていけるよう、引き続き生徒の能動的市民性を育てていきたい。

2. 1. 4 1年次未来創造探究

今年度より、1年次から未来創造探究が始まった。1年次前期火曜の6・7校時と夏季休業期間中の授業を「地域創造と人間生活」(以下地創)とし、後期の火曜の6・7校時を総合的な探究の時間とした。

1. 概要

前期を中心に行った地創の中では、系列・高入/一貫の区別なくグループを作り、地域の課題を見つめて演劇を製作した。総合的な探究の時間では、「リッチピクチャー」を用い、地創の演劇製作を振り返って地域課題の構造を可視化するところからスタートした。

その後、生徒の中学時代の取り組みや活動の中で立てた問い等をもとに、学年を5チームに分け、チームごとに指導者と対話を重ねながら、課題設定と調査のアクションに取り組んだ。なお、5チームの内訳は、調査グループ1つと課題発見4グループ、うち前者はある程度の課題設定が済んでおり、早期から調査アクションに取り組む生徒集団、後者を課題の発見にいていねいに取り組む集団とした。

2. 調査グループ

問いつくり→課題設定→調査アクション→個人面談→プレ発表

調査グループの中には、ふたば未来学園中学からの一貫生が多く含まれている。併設中学在学時の探究活動では、主に福島県双葉郡が持つ観光資源や地域住民の活動に着目し、魅力を知って発信することをゴールに設定していた。そのため、中学時にある程度の発信をし、そこを一区切りにした生徒の中では、高校での活動継続につなげられない場面が散見された。ふたば未来学園高等学校では、課題発見→調査→解決アクションの螺旋構造で探究活動に臨むことになるため、「中学で考えた手段を使っていかに社会を創造するか」という問いに昇華させるよう伴走する必要がある。

地創の授業からつなぐ課題設定の際には、併設中学校時代の探究活動からはいったん離れ、演劇の振り返りや、自分が高校進学後に学んだことや高入生との一貫生の交流の中で見えてきたことを中心に、自らの進路とのかかわりを見出しながら課題設定を行わせるようにした。結果、中学時代に取り組んできたことを調査・解決のアクションに位置づけて探究活動を始めた生徒や、新たな課題の解決に取り組む生徒が混在するチームとなった。

3. 発見グループ

調査グループより長めの問いつくり・課題設定→個人面談をしながら調査アクション→プレ発表

高校から入学してきた生徒が多めに含まれるチームであるため、探究活動の導入期は、アインドマップ等を通じたアイデア出しと、それをもとに行う問いつ

りに多めに時間を割いた。また、比較的

早く問い作りが進んだ生徒は調査チームに移動させるなどして、人数は多いながらも、個別最適化を図った。

マインドマップや生徒が立てた問いをもとに、発見チームは4チームに分けて活動を進めた。このチーム分けは、後述の2年次ゼミの再編成計画をもとに、おおまかな学問分野や活動のジャンルによって編成されたものである。ただし、活動中は他のチーム伴走教員からのアドバイスを受けることも奨励し、多面的・多角的な課題設定につながるよう配慮した。

4. 今年度の調査実績

(1) 新書マップ(<https://shinshomap.info/>)

良質なインプットは書籍から得ることが基本となるが、どのように検索をかければよいかかわからない生徒に向けて、下図のようなサイトを紹介した。



検索ワードを入れて表示されたポイントをクリックすると、参照候補となる新書が本棚に入って表示される。

(2) 書籍

調査チームでは特に、授業中の対話の中でおススメの書籍を提示することを多く行った。生徒からは、「いったん書籍を読み始めると、必要箇所がどこかわからないから、結局読まずに済ませてしまうことが多い」「読み終わってから探したものと違うことに気づいて、時間がないうち中読んできたのがっかりする」などの声もあった。そのような経緯で探究の教室や1-4教室に数冊本を準備して紹介することにしたが、「同じ著者の別の本などに挑戦した」など、うれしい報告も聞こえてきた。

(3) 新聞データベース

以下のデータベースのアカウントを取得し、調査に活用した。

朝日けんさくくん

1985年以降の朝日新聞や、系列雑誌の記事などを読むことが出来る。

ヨミダス for スクール

1986年以降の読売新聞の全国版・地域版の記事を読むことが出来る。

(4) 大学院生インタビュー

本校卒業生で、福島大学大学院生の遠藤健次さんをお呼びし、理系の探究活動に助言をいただいた。バイオマス科学会年間奨励賞、日本炭化学会技術部門賞を受賞している卒業生の活躍は生徒に響いた。

(5) 生徒の活動内容

調査グループ生徒(I.K)

日本地理学会主催 2023 年春季学術大会
高校生ポスターセッション出場

[要旨] 福島県双葉郡広野町には、晩秋から春先にかけて阿武隈高地からの強風が吹く。地元民が「五社山おろし」と呼ぶこの風は、その実態についてはほとんど研究が行われていない。そこで、本研究では、アメダスのデータや地形の検証を通して、「五社山おろし」の局地風としての特殊性を検証し、その実態を定義付けすることを目的としている。令和3年より続けている本研究では、地元住民へ「『五社山おろし』の具体的な特徴」についてのアンケートを取った。また、1976年から2022年までの広野と他の浜通りの3地点の冬季の気象データを基に、当期間の日最大風速7m/s以上の日数とその風の16風向の割合を調査した。これらの検証結果から、冬型の気圧配置時に西北西から吹く強風が「五社山おろし」とであると考察した。今後は、QGIS等を用いた地形の調査データを集積し、地形の変化で当該強風の特殊性が現れるのかなどの考察を行っていきたい。

<https://www.ajg.or.jp/20230306/16303/>

発見グループ生徒(A, M, Rの3名)

サステイナブルアートに興味を持った3名が集まり調査を行った。調査や担当教員への相談を進める中で、本校7期生までの探究活動でお世話になった方で、NPO法人ザ・ピープルの吉田恵美子様が取り組む、古着のリサイクル活動に興味を持った。吉田様にインタビューを行い、助言をいただいた。実際に作業場を訪れ、ボランティア活動にも参加させていただき、古着を用いたサステイナブルファッションを行おうと考えた。

次に、双葉郡に目を向けてみると、富岡町にオープンしたYONOMORI DENIM (ヨノモリデニム) とのつながりに気づいた。実際に担当教員とお店を訪れ、インタビューをし、お話をお聞きすることができた。

5. 課題

昨年度まで、本校高校1学年には総合的な学習(探究)の授業が設定されておらず、「産業社会と人間」や「地域創造と人間生活」のみを履修していた。今年度のカリキュラムから、1学年でも総合的な探究の時間を1単位履修することとなり、観点別評価の導入の時期も重なった。今年度は、担当者間で協力して評価を行ったが、圧倒的に知見の蓄積が足りないという問題がある。

プレ発表実施後に、各会場のアドバイザーの助言をもとにループリック評価を行う十分な時間を確保したい。ループリック面談をしながら、形成的評価・総括的評価について、ゆとりをもつて行う時間を残しておく必要がある。

本校のループリックが Google Forms になった結果、生徒は前回何を書いていたのかがわからず、手元に文章が残らない状態になっていた。例えば、ドイツ研修の参加生徒に参加後のループリック調査・インタビューを行ったが、数日たっただけでも自分が何を記入したのか忘れてしまっているため、Spreadsheet から記述データを印刷し、本人と眺めながら面談をすることになった。

また、自身の成長を実感した場面について、生徒が文章で記入しても、入力した Form が手元に残らない設定であったため、後日発表原稿を作るような場面でも Spreadsheet 上に展開されたデータを個々にデータで返却する手間になった。

各学年では、年度末のLHRの授業内で1年間の学習の振り返り(≒指導要録作成に活かす情報のとりまとめ)を行っている。担任ではない探究活動の担当者にも引き続き協力をいただき、学校全体で形成的評価に生かしたい。